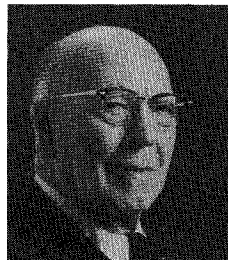




# 聖徒の道

3 1981





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トマス・S・モンソン  
ボイド・K・バックナー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
レックス・D・ピネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシュ

国際機関誌

編集主幹：  
ラリー・A・ヒラー  
編集副主幹：  
キャロル・モーゼス  
子供の頁編集：  
ハイデイ・ホルフェルツ  
デザイナー：  
ロジャー・ギリング

もくじ

神の子を教える……………N・エルドン・タナー……………1

「聖霊は常に汝の伴侶となり」……スペンサー・J・コンディー……5

約束された祝福  
質疑応答……………ラリー・ヒラー……………10

戻ってきた祝福……………ハンス・ウィルヘルム・ケリング……………13

じっくり考えなければ……………ヒュー・W・ピノック……………15

ならないこと

神の愛されるものを愛すること…デニス・R・ピーターソン……………17

サボテンと十字架と復活祭……………ジェフリー・R・ホランド……………21

聖餐の祝福……………スーザン・ピエール……………24

ジョン・テイラー……………27

おもちゃばこ……………28

虹の向こうに……………コンスタンス・ポルブ……………29

卒業式に思う……………ディーン・L・ラーセン……………33

生きている什分の一……………キース・ムーア……………36

宣教師になる……………リグランド・リチャーズ……………37

ローカル・ニュース……………45

表紙写真：

ドン・マーシャル撮影

聖徒の道 3月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布 5—10—30

印刷所 株式会社 精興社

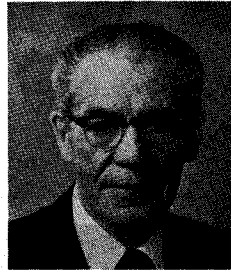
配送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀 4—9—19

定価 年間子約2,200円  
海外子約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA (0551 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0—41512  
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

# 神の子を教える



第一副管長

N・エルドン・タナー

**私**はこのメッセージを、現在教会の指導者として働いている方に、またやがて指導的立場に就くであろう方に、そして、そのような指導者の下で働いている方々に送りたいと思います。

教会員として私たちは、神の王国すなわち地上における主の教会の業を推進する責任が一人一人に課せられていることを自覚しなければなりません。この責任を果たすに当たって、心に銘記しなければならぬ基本的なことがいくつかあります。

まず、私たちは皆、神の霊の子供であるということです。私たちが何者であり、なぜこの地上にいるのか、それを的確に示しているのは、私たちのよく知っている詩「わたしは神の子」であると思います。

私は神の子  
神がここに送って下さった  
やさしい両親のいるこの家庭に  
私は神の子  
なすべきことを多くいただいている  
遅すぎないように早くから  
み言葉を理解できるよう助けて下さい  
私は神の子  
天にはあふれるばかりの祝福があり  
みこころを行ないさえすれば  
再び神のみもとに住むことができる

私を導き、共に歩いて下さい  
道が見いだせるよう助けを下さい  
私のなすべきことを教えて下さい  
いつか神と共に住むことができるように

(「子供の歌」B-76参照)

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であること、そして、天の御父のみこころを行なっているのだという自覚をもって予言者の指示の下で働けること、これは何にも勝る特権です。私は、スペンサー・W・キンボール大管長が神の予言者であり、今日地上における主の教会の諸事を導く人であることを知っています。このことを証として申し上げます。

私は、末日聖徒イエス・キリスト教会で教師として働けることほど素晴らしい召し

はないと考えています。ある意味で、私たちはすべて教師であると言えます。任命を受けた受けないにかかわらずそうです。救い主御自身は、最も偉大な教師として知られています。いかなる時にあっても主を手本とし、その模範に従おうではありませんか。

私は、救い主がアメリカ大陸の人々を訪れて下さったことを考えるたびに、胸が熱くなるのを覚えます。この出来事をはじめその他多くの出来事や主の語られたたとえ話から、イエス・キリストが実際に生きた



もうことがわかります。また、私たちに関心を寄せ、愛を注いでおられること、私たちの幸福を願って、義しいことをせよと言っておられることがよくわかります。

子供たちに対して（天父の目から見れば私たちすべてが子供ですが）、イエスが深い愛と関心を抱いておられることは、イエスがアメリカ大陸を訪れたもうた時のことを記録した聖文に、実によく示されています。

「それからイエスは人々にその小さい子供たちを連れて来よと仰せになった。

そこで人々はその小さい子供たちを連れて来てイエスをとりまいて地上にすわらせた。イエスはその真中に立っていたもうた。群集は子供たちをみなイエスのところへ連れてくるまで道をあけていたが、

子供たちをみな連れてくるとイエスはその真中に立ちたもうて、群集に地へひざまずけと仰せになった。

群集が地へひざまずくとイエスは心の中でうめいて『父よ、われはイスラエルの家に属する者の罪悪のために悲しむ』と言い、こう言って自らも地にひざまずいて御父に祈りたもうた。その祈りは書くことができないが群集の中でこれを聞いた者たちは次のように証を立てた。

『私たちが見たり聞いたりしたイエスの御父に対するお祈りは、人の目がまだ見ず、耳がまだ聞かないほど偉大で驚嘆すべきものである。

これを口で言いあらわせる者もなく、筆で書きあらわせる者もなく、また人間の心

で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。イエスが、私たちのために御父に祈って居りたもうのを聞いたとき、私たちの心に満ちた喜びは人間の想像ができないものである』と。

さて、イエスは御父に祈ってしまうと立ち上りたもうたが、群集は喜びのあまり疲れてしまった。

しかし、イエスがかれらに言って起てと命じたもうと、

かれらは直ちに地から起ち上った。ここに於てイエスは『汝らはその信仰の故にさいわいなり。見よ、今わが喜びは満ち溢れたり』とかれらに言って、

涙を流したもうた。これは群集が親しく見て証をするところである。イエスはそれからかれらの小さい子供たちを一人一人近づけてこれに祝福を与え、かれらのために御父に祈りたもうた。

そしてこれをしてしまうとまた涙を流したもうた。

イエスが群集に『汝らの子供たちを見よ』と仰せになったから、

群集がこれを見ようと顔を上げる時天を仰いで見ると、天が開けて天使らが火の中に取り巻かれているような有様で天降り、子供たちを取りかこんだので子供たちもまた火に取りかこまれ、天使らは子供たちに祝福を与えた。」（Ⅲニューフェイス17:11-24）

これほど美しい光景、素晴らしい経験を想像することができでしょうか。この話から、主がいかに私たちを愛しておられ、また天使が私たちを見守っているかがよく

わかります。また私たちは、天の御父に祈るといふ特権に浴していることもわかります。いつくしみ深い御父は、私たちの祈りに耳を傾け、答えを与えて下さいます。子供の考え方や生活に良い影響を及ぼすものとして、最も効果があるのは、適切なお話や絵、写真、模範といったものを通して、絶えず子供たちの前に正しい考え方を示すことです。

幸いなことに、私たちは末日聖徒として、父なる神が生きておられ、イエスがキリストであることをはっきりと知っており、この御二方が個人的に私たちを見守って下さることや、私たちには真実かつ永遠の福音が与えられていることを証として述べることができます。私たちがこの証を持っていること、この証に対して心に一点の疑いもないこと、心と勢力と思いと体力を尽くして主を愛していること、また、すべての面で主に仕える備えをしていること、これらのことを他の人々に知ってもらうために日々生活しようではありませんか。主はこう言われました。

「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。」(ヨハネ15:10)

救い主の与えられた次の勧告と約束が確かに真実であることを、私は自分の生活の中でこれまで幾度となく体験し、証明してきました。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。

そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイ6:33)

現代は、神の王国と神の義を最初に求めることが実に難しく、ともすればこの世的な事柄に目が向き、物質に執着しやすい世の中です。ですから、最も大切なのは、言葉と模範によって効果的に教えるよういつも心の準備をしておかなければならないということです。古い格言にはこうあります。「行動は言葉よりも声高く語る。」このことを忘れないで下さい。

あらゆる組織の指導者たちが、救い主が言われたように「わたしに従ってきなさい」と胸を張って言えるような生活をし、天父の子供たちが真理と義の道に導かれていると確信できるようであれば、この世は何と素晴らしいものとなるでしょう。

私は、昔読んだ次の詩をいつも思い返しています。

私はまだ子供

私の行く末はあなたの手の中

私が成功者となるか敗北者となるか

あなたが鍵を握っている

どうぞ教えて下さい、幸福をもたらすものをどうぞ鍛えて下さい、世の中の役に立つ者になれるように

私たちが模範と言葉によって、もっと住みよい世の中を作る手助けができるよう生活し、教える時、私たちは天父に対する自らの責任を果たしていると言えるのです。私たちすべてが、そのような決意をすることができるよう祈っています。

# 「聖霊は常に汝の伴侶となり……」

## 約束された祝福

スペンサー・J・コンディ

二 世での務めが終わりに近づいた頃、  
救い主は使徒たちに来るべき別れに  
対する心の備えを始めたもうた。救い主は次  
のように約束しておられる。「わたしは父に  
お願いしよう。そうすれば、父は別に助け  
主を送って、いつまでもあなたがたと共に

おらせて下さるであろう。」(ヨハネ14:16)

「わたしが去って行かなければ、あなた  
がたのところに助け主はこないであろう。  
もし行けば、それをあなたがたにつかわそ  
う。」(ヨハネ16:7)

この主の約束は古代の教会の使徒たちに



向けられたものであるが、回復された教会のすべての会員にも当てはまる。親であり子であり、あるいはホームティーチャーや訪問教師であり、ふさわしい生活をしていれば、使徒や予言者たちの場合と同様に聖霊は共にいて下さるのである。

愛弟子ヨハネによって実に生き生きと記されている慰め主についてのこの印象的な話の中で、主は、聖霊がどのような方法で私たちの日々の生活に影響を及ぼすかがある程度明らかにしておられる。以下に挙げる実例がそれを示している。

「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。」(ヨハネ14:18)

お産で命を落としたある若い母親の葬儀が終わりに近づくにつれて、参列者の間には深い悲哀の情があふれていた。追悼の言葉は切々と胸に迫るものであったが、その日参列していた多くの人には心に何か受け入れ難いものを感じていた。遺された父親は4人の幼い子供を抱えて悲嘆に暮れているというのに、慈悲深い天の御父がどうして母親が逝くまににされたのだろうか、と思ったのである。

ところが葬儀の最後に、妻に先立たれた若い父親は落ち着いた様子で席を立つと、説教壇の方に歩いて行った。そして、静かに話し始めた。「皆さんが悲しみ、心配して下さるお気持ちはよくわかりますが、ぜひ皆さんにお話しておきたいことがあります。

妻が亡くなってから一時の間、私は途方に暮れました。とても妻なくしてやって行けそうにないと思ったのです。でもその時でした。私の心は平安な気持ちで一杯になったのです。その時から私は、すべてはうまくいくと確信しています。私たちのことはもう心配なさらないで下さい。本当に元気にやっていますから。」

参列者はこの話を聞いて、一様に心が安まるのを感じた。そして、だれもが心に慰めを得て帰って行った。

「罪……について、世の人の目を開くであろう。」(ヨハネ16:8)

ベンジャミン王は神を賛美するその説教の中で、肉欲に従う心を克服するためには「聖霊の導きに従」(モーサヤ3:19)をしなければならぬ、と聖徒たちに教えている。アルマもまた、聖霊は、私たちが罪に打ち勝つことができるように絶えず導きを与えて下さっているということに言及して、「この上聖霊に逆らわ」(アルマ34:38)ないようにと兄弟たちに忠告している。

次に紹介するのは、善い行ないをするようにという慰め主の導きを強く感じた、ある中年ビジネスマンの実際の話である。

ジョンソン兄弟(仮名)は20年来、喫煙の習慣に悩んできた。心の中では是が非でも教会に活発になりたいと思いながら、どうしてもこの習慣が主との間の打ち勝ち難い障害となったようである。それで教会の



活動には足が運べないでいた。

風の強い、ある冬の日の仕事中であった。タバコをすっぱりとやめられない自分の意志の弱さにつくづく嫌気がさしていたジョンソン兄弟は、ふと仕事をやめて帰るようというかすかなみたまのささやきを感じた。そこで彼は雇用主に早退したい旨を話して、勤務先を出た。新雪が降り積もって寒い天候であったが、そんなことには構わず、彼は人里はなれた峡谷の方に歩いて行った。だれにも邪魔されないひとりきりの世界で、身も心もさらけ出して主に祈り求めたいという気持ちにかられた。彼は、雪が深すぎてこれ以上は先に進めないという所まで峡谷を登って行った。

それから彼は、心からへりくだって主に祈り始めた。彼は主に、自分を捕えているニコチンの力から逃れられるように強めて下さいと懇願した。そして、この熱烈な祈りの後、彼は別人のように変わった。

ジョンソン兄弟はタバコの奴隷から解放されたのである。彼は真理を求めた。そして真理は彼に自由を得させたのである。それから半年後、ジョンソン兄弟はワード部の監督に召された。ジョンソン兄弟は忠実に、また献身的に働いた。

「聖霊は、あなたがたに……ことごとく思い起させるであろう。」(ヨハネ14:26)

今は大きな志を抱いている大学教授が大学院生時代のことである。ある一流大学か

ら博士号を得ることを望んで、彼はずっと懸命な努力を重ねてきていた。そして最後の口頭試問。準備は万全だった。彼と妻は、試験の時主のみたまが共にいてくれるように願って、何日か断食し、一心に祈った。

口頭試問の前夜、この若者はなかなか寝つけず、何度も寝返りを打っていたが、やがて徐々に気持ちが安らいできた。その内に、彼は次の日試験で問われる質問を心の眼で見たのである。彼はさっそく心の中で、頭に浮かんでくる一つ一つの質問に答える準備を始めていた。

翌朝、彼は指定の時間に試験に臨んだ。驚いたことには、学位審査委員から最初に問われた質問は、前夜彼の心に浮かんだ最初の質問であった。彼は喜んだ。それから試験は進んで次々に質問が出されたが、その順序は前夜彼の頭に浮かんだ質問の順序とまったく同じであった。言うまでもなく、彼は見事な成績で試験に合格した。それ以来、彼は自分の人生と仕事を主に仕えるために捧げている。

「聖霊が(福音を)人の心の中に浸みこませるからである。」(IIニーフай33:1)

端正な顔立ちをしたそのアメリカ人の若者は、チェコスロバキアに来てまだわずしかたっていなかった。彼はまったく語学の訓練を受けなくて、チェコの人々に福音を伝えに来なければならなかった。さてその彼が、聖徒たちや関心を持っている求道

者たちに初めて話をする時がやってきたのである。先輩の同僚は、彼が話の原稿を書くのをいろいろと助け、また非常に難しいチェック語の発音についても教えてやった。そして、ついに彼がひとり会衆の前に立つ時が来た。

若者は話し始めた。先輩の同僚は、若い後輩がチェック語の文法をことごとく無視して話を進めていくのを無言で耐えていた。しかし、すべてが失敗に終わったわけではなかった。彼の発音がまったくひどくて、とにかく何を話しているのかほとんどの人にわからなかったからである。

ところが、集会が終わった後、落胆したのかちょっときまり悪そうにしていたこの若い長老のところにはひとりの年配の女性がやってきた。涙にぬれた頬で、声を震わせながらその女性は（通訳を通して）長老に話した。「あなたのおっしゃったことはみんな真実です。それで私、バプテスマを受けたいと思います。」モルモン経には、「人が聖霊の力で語るときには、聖霊がその話を人の心の中に浸みこませる」（Ⅱニーファイ 33：1）という約束がある。

神の選り抜きの僕たちの中で、エノク、モーセ、エライジャは<sup>譯</sup>訥弁であった。明るい表情と達者な話し方は福音を伝えるために望ましいことではあるが、改宗を生むのは文の構造ではなく聖霊である。

「……聖霊は、あなたがたにすべてのこと

を教え……るのであろう。」（ヨハネ 14：26）

その若い夫婦は、4人の威厳のある兄弟たちが家にやってきて、ソファーに腰をおろした時、心配そうにちらっと顔を見合わせた。妻の方は2カ月前に生まれた双子の赤ん坊を優しくゆすり、3歳と5歳になる上のふたりの子供は、真剣な顔つきをした4人の兄弟たちを好奇のまなざしでじっと見ていた。

ステーキ部長が妻の方に尋ねた。「姉妹、もし主があなたの御主人をシオンの新しいワード部の監督に召されたとしたらどのようにお思いになりますか。」

彼女は4人の幼い子供たちを見ながら、夫が監督の務めを果たすようになった時に増す自分の責任のことを考えた。それから彼女は何のためらいもなく答えた。「それが主の望まれることでしたら、できる限りのことをして夫を助けたいと思います。」

若い夫はそのような召しがいつか、多分40代か50代になって十分な備えができてから来るだろうと思っていた。それが30歳そこそこで召されたのである。数日前、彼はみたまによってその召しが来ることを示されていたのであるが、それでもなお自分はまだくふさわしくないし、荷が重過ぎると思った。

召しの大きさを考えて、何日か眠れないう夜があった。どのようにして新しいワード部を組織するのだろうか。どうすれば副監督、扶助協会役員教師、ホームティーチ

ャー、日曜学校教師、聖歌隊指揮者、あるいはワード部新聞の編集長として主が望んでおられる人を確信をもって召すことができるのだろうか。あれこれ考えて気ばかり焦るのだが、かと言ってうまくやっていく自信などまったくなかった。

それから2、3日して、ステーキ部内の監督全員とステーキ部長会の集いが持たれた。まず年配の経験豊かな監督たちが助言と忠告を与えてくれた。召されたばかりの監督は手引き類をはじめとして、監督の訓練ガイド、神権会報、その他の資料を受け取った。それからステーキ部長会のそれぞれが、教会での豊富な経験から賢明な助言を与えてくれた。そして最後に、全員がひざまずいて、イスラエルの判士としての責任を果たす時に主のみたまの導きがあるようにと祈った。

この監督は、その日車を運転して家に帰る途中、みたまの存在を強く感じたと言う。ちょうど不自然な姿勢を長く続けた時に手足がしびれてびりびりうずくように、みたまが注がれるのをはっきりと体で感じたのであった。彼は自信と慰めを得た。そして今では主のみ業に熱心に従っているとのことであった。

その後もこの監督は、ワード部の聖徒たちの福祉にかかわる数々の決定を下す時にはいつでも聖霊を伴侶とした。監督はまた、「神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして、天の能力は正

義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり」(教義と聖約121:36)という非常に大切な戒めを学んだ。

聖霊の導きを受け、神権の権能を与えられるかぎはここにある。逆に「もし己が罪を蔽い<sup>おお</sup>かくさんとし、われらの高慢、空しき野望を充たさんと企て、または幾分にて正しからざることによりて人の子らを支配し、統御し、強制せんとする時は、見よ諸天は退き去り、主の『みたま』悲しむ」(教義と聖約121:37)のである。

どうすれば常に聖霊の導きを受けられるか

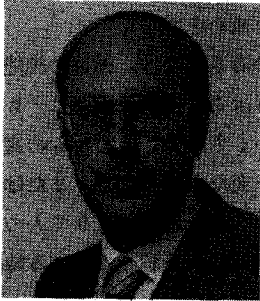
近代の啓示の中で主は、聖霊の賜を続けて受けることにより慰め主を絶えず伴侶とする方法を示して下さっている。その方法は次の通りである。

「すべての人に対して、また信仰ある家族に対して汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。絶えず徳を以て汝の想<sup>おも</sup>を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。

聖霊は常に汝の伴侶となり、汝の<sup>しやく</sup>勞は真理と正義の変ることなき<sup>しやく</sup>勞となり、汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」(教義と聖約121:45—46)

# 質 疑 応 答

本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



ラリー・ヒラー

(テラーズビル・ユタ・セントラルステークス部テラーズビル第9ワード部監督、国際機関誌編集主幹)

---

聖餐をとるべきでないのはどのような場合でしょうか。

---

この質問に答えるために、まず非常に大切な真理をいくつか思い出してみましょう。この世で人が負う重荷の中で、罪の重荷ほど耐えがたいものではありません。しかし、悔い改めに必要な段階を踏んでその重荷を取り除くならば、それはだれにとっても最も喜ばしく心に満足を覚える経験になります。もし救い主がおられず、贖いの犠牲がなかったならば、私たちは罪の重荷をこの世だけでなく、永遠にわたって負うことに

なるでしょう。そして、私たちは神のみ前から断ち切られ、悪魔に支配されるのです。

私たちの生活における贖罪の大いなる意義は、言葉だけでは伝えられないものがあります。そこで主はひとつの儀式を定められ、私たちが絶えず主の贖罪を思い起こして、感謝の気持ちを育めるようにして下さいました。

イエス・キリストが死後復活されたということは、地上に生を受けたすべての人がいつの日か復活できるようになったということの意味します。しかし、罪からの贖いは、イエス・キリストを認め、罪を悔い改め、正しい権能を持つ人の手により正しい方法でバプテスマを受けた人にものみ与えられます。罪の赦しを受けるには、キリストの贖罪と私たちの悔い改めが必要です。バプテスマを受けることは、それによって私たちが主との誓約に入ることを意味しています。

私たちはバプテスマを受けても、完全に罪から離れて生活する力を持っていないので、引き続き信仰と悔い改めの原則を適用していかなければなりません。そこで、主の偉大な贖罪を絶えず心に留め、バプテスマの時に交わした誓約を新たにすることができるよう、救い主は聖餐を定められたのです。

聖餐のパンと水は、救い主の裂かれた肉体と流された血を思い起こさせます。また

聖餐の祈りはバプテスマの時に交わした誓約を繰り返し述べています。その誓約とは、(1)イエス・キリストのみ名を受け、(2)キリストを常に忘れず、(3)その戒めを守る、というものです。それに対して主は、主のみたまが常に私たちと共にあることを約束して下さいます。

バプテスマを受ける前に悔い改めが必要のように、聖餐にあずかる前にも悔い改める必要があります。モルモン経には次のように記されています。「バプテスマを受ける資格のない中は慎んでバプテスマを受けてはならない。キリストの聖餐を受ける資格のない中は慎んで聖餐を受けてはならない。」(モルモン9:29)

私たちは主から完全になるように命じられており、聖餐はその過程において不可欠な要素です。毎週罪を克服するために努力し、日曜日に聖餐を受けられるように備えるならば、次第に生活の中から罪を締め出すことができます。そして、聖霊の勧めに応えて行動できるようになるにつれて、良心はますますその勧めに鋭敏になります。言葉を換えて言えば、救い主を常に覚えて戒めを守るために努力する時に、私たちは約束の聖きみたまを受けるのです。

それでは、聖餐にあずかるべきでないのは、どのような場合でしょうか。聖餐は完成へ向かう一段階ですから、完全な状態です。それにあずかるように求められてはいません。しかしすでに参照した聖句に見られる

ように、「資格のない中は」聖餐を受けてはならないと警告されています。アメリカ大陸を訪れた救い主は弟子たちに次のように語られました。

「われが今汝らに与うる誠命は、わが肉(のしるしなるパン)と血(のしるしなる葡萄液)とを分かち与うるときに、誰にてもこれを飲みまた食う資格なしと汝らの認むる者あらば、その者にこれを飲みまた食うことを許すべからず、と言うことなり。

わが肉(のしるしなるパン)を食ひ、またわが血(のしるしなる葡萄液)を飲む資格なき者がこれを食いかつ飲むとせば、かくすることによりてその者は身も霊も救われざることになるなり。」(III ニーファイ 18:28—29)

パウロは同じような警告をコリントの聖徒たちに書き送りました。この警告から、聖餐を受けるべき時と、そうでない時とを区別するもうひとつの手がかりが得られます。パウロは次のように記しています。

「だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである。」(I コリント 11:28)

救い主がニーファイ人に語られた言葉から、聖餐の儀式を執行する人々は資格のない人がパンや水を取ることをないようにする責任があります。ワード部では管理役員である監督がこの責任を負っています。監督は罪を告白した人に対して、一定期間聖餐を取らないように勧告することができます。

す。その期間は罪の重大さや悔い改めの程度により、また個々の状況に基づいて監督が判断した他の要因により異なってきます。教会法廷によって正会員資格を剥奪された人や破門された人は、復権するか再度バプテスマを受けるまで、聖餐にあずかる資格はありません。

またパウロの言葉からわかるように、私たちには自分自身を吟味してから聖餐を受けるという大切な責任が課せられています。監督に告白する必要がある重大な罪を犯している場合は、正しい方法でその問題を解決するまでは聖餐にあずかるべきでないのは明らかです。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58:43) 告白する必要があるかどうか自分で判断がつかかねる場合は、監督に相談するようにお勧めします。監督はあなたの話に耳を傾け、秘密を固く守ってくれます。そして、あなたが問題を大きな目で把握できるように助け、罪の赦しを得て自分に対して安らかな気持ちを取り戻すために何をすればよいかを教えてください。

それでは、告白する必要のない問題についてはどうすればよいでしょうか。それは、次のように自問して自分自身を吟味することです。私は自分の罪を認識し、それを克服しようと努力しているだろうか。心から悔い改めているだろうか。私の心は憎しみや怒り、皮肉などで満ちていないだろうか。平安を感じているだろうか。今週は

先週よりもさらに義しい生活が送れただろうか。救い主が私のためにして下さったことに心から感謝しているだろうか。聖餐を取る前にこのような質問を自分自身に投げかけてみるとよいでしょう。真剣になって考えるならば、答えはおのずと明らかになると思います。

聖餐を受ける前にしばしの間、「私はふさわしいだろうか」と問いかける人は、何も考えずに習慣的に聖餐を受ける人よりも、ある意味ではるかに高い段階にいると言えます。また、自分はふさわしくないと感じた時に聖餐を受けずにいる勇気を持つ人は、悔い改めの非常に大切な段階を踏んでいます。なぜなら、そのような人は、主が私たちについて考えておられることに、他の人よりも深い注意を払い始めているからです。

次にあげる日曜学校の福音の教義クラスのテキスト(1967—68年版)の一節は、一読に値するものと言えましょう。「自分自身がふさわしくないと感じながら悔い改めていない人は、聖餐会に出席し、しかも聖餐を取らずにいる勇気を持つべきである。聖餐を取らない人を見かけても、その理由を詮索してはならない。私たちは、ふさわしくないと自ら感じる人が聖餐を受けずにいられるような雰囲気を作るべきである。聖餐を受ける資格のない人が聖餐会に欠席したり、周囲の圧力を感じて聖餐を取ることがあってはならない。聖餐を受ける資格のない人は、『身も霊も救われざる』状態に陥ることを避けるために、パンと水を取らないようにすべきである。」(p.187)

# 戻ってきた祝福

ハンス・ウィルヘルム・ケリング

**数**年前、私はドイツ・ミュンヘン伝道部の伝道部長であった時に信仰を強められる珍しい経験をしました。私はいつものように、ブライス・ベタリッジ長老とグレゴリー・スミス長老のふたりの伝道部長補佐と話し合っていました。話の要点を強調するために、私は20年程前にニュージャージー州トレントンで伝道した時の経験を引き合いに出しました。その町のことを話すと、スミス長老が驚いたように、自分の生まれ故郷はニュージャージー州トレントンがいつ伝道していたのですかと尋ねました。私が「1954年」と答えると、彼はさらに驚いたようでした。彼が生まれたのがちょうどその年だったからです。それから彼の家族構成などを聞いていくうちに、自分がその青年の人生に大きななかかわりを持っていることがわかってきました。そしてその時のことがはっきりと胸によみがえって

きました。

私が同僚とふたりでトレントンに支部を組織するために召された時、教会員はまだ多くありませんでした。しかし、主の祝福により幾組かの家族を教え、バプテスマを施すことができました。支部は次第に大きくなっていきました。

ある日、その頃御主人がまだ活発ではなかったスミス姉妹が、私たちのところに来て、特別な祝福を頼みました。彼女は妊娠中でしたが、医師の診断の結果、胎児の発育と出産に異常の恐れがあるということです。スミス姉妹は聖典に載っている主の勧告に従い、主と神権を信じて、助けを求めて来たのでした。

私はその出来事を自分の伝道日誌に記録しました。灌油の儀式的結び固めをした時のあの穏やかな気持ちは今でもよく思い出すことができます。私は聖霊の力を感じ、

子供は何の障害もなく五体満足で元気に生まれ、やがて主に仕えるでしょうとスミス姉妹に約束しました。

その後間もなく私は転任しましたが、2、3カ月後に地方部大会でスミス姉妹と会った時のことは忘れることができません。彼女は腕に健康そうな可愛い男の赤ちゃんを抱いていました。込み上げてくる感激、感謝、誇らしさ、そして神権の力を、私は今でも覚えています。日記に、父親になるのがどんな気持ちかわからないが、この日スミス家の赤ちゃんを見て感じた気持ちのよなものかもしれないと記しました。

伝道が終わってからは、スミス家の人々やこの赤ちゃんがどうなったかまったくわかりませんでした。しかし、ドイツの伝道本部でスミス長老とベトリッジ長老と会って一緒に座った時、あの美しく素晴らしい出来事が脳裏によみがえってきたのです。この青年は、本当に私が21年前に自分の腕に抱いたあの赤ちゃんでしょうか。私はスミス長老に、自分の出生について変わった話をお母さんから聞いたことがないか尋ねました。答えは私の予期した通りでした。そこで私は、そのことについてもっと詳しくお母さんに聞いて欲しいと頼みました。2週間後にその返事が来ました。ドイツ出身のケリング長老という宣教師から祝福を受けて、その結果息子は正常に生まれたとお母さんは書いていました。

その時の気持ちはどう表わしたらよいかわかりません。主は何年も昔の祝福を小さな僕に今返しておられるのです。「あなた

のパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」(伝道11:1) このドイツの主のぶどう園で共に働き、神聖な召しを手伝ってくれているのが、21年前に自分が出産の祝福をしたあの赤ちゃんだったのです。スミス長老は主の神権の力によって命を与えられ、健康にも能力にも深い信仰にも恵まれ、そのすべてをもって主に仕えていました。

主のはからいに対する喜びと驚きと感謝が私の胸に込み上げてきました。スミス長老を自分の補佐に召した時、私は彼がトレントンで生まれたということを知りませんでした。200人もの宣教師を管理していたので、一人一人がどこで生まれたかなどいちいち覚えていられないからです。私はスミス長老が靈感によって補佐に召されたと思っています。彼がドイツのミュンヘン伝道部に派遣されたのは偶然ではありません。会合の中で私がニュージャージー州トレントンのことを話し、スミス長老が自分の生まれ故郷はそこだと話したのも偶然ではありません。

さて、この後私たちにどのようなことが起こったのでしょうか。スミス長老は福音と自分の召しに対する証を強くすることができました。神権の力に対する私自身の証も強まりました。私は、私たちに対する天父の愛を強く感じました。慈悲深くやさしい主は、僕が困難な仕事を無事果たせるように、力強い励ましと証を与えて下さったのです。



人生には、じっくり時間をかけて考えなければならぬことがあります。考えればそれだけ人生が楽しく、実りあるものとなるのです。きょうは、そのようなものを3つあげることにしましょう。

まず第一に、「自分は一体どういう人物になろうとしているのか」ということです。「ハムレット」の中でオフィーリアはこう言います。「今日のことはわかって、明日のことはちっともわからないのね」（第

4幕5場、三神勲訳）福音がまだ回復されなかった17世紀においては、シェークスピアでさえ人の行く末はわかりませんでした。しかし、私たちは知っています。そしてこの知識こそが、イエス・キリストの福音なくしては理解することのできない広がりをも人生にもたらしてくれるのです。

スペンサー・W・キンボールは1973年12月27日に予言者になりました。しかし、予言者としての生涯が始まったのは、それよ

---

## じっくり考えなければならぬこと

七十人第一定員会会員  
ヒュー・W・ピノック



1915年6月、ミズーリ州セントルイスでポーズをとるスペンサー・W・キンボール(左)と同僚のL・M・ホークス

りももっと前のことでした。つまり若い頃から、将来起こることのために備えをしていたのです。私たちも同じです。きょうの行ない、きょうの思い、きょうの言葉で、昇栄への道を歩むのです。

私はユタ大学でひとりの若い女性と知り合いになりました。キャシー・マッケイという名の優れた音楽家です。彼女は両親から、人の永遠の行く末は日々の行ないによって決まると教えられました。こうして彼女は会うすべての人にとって素晴らしい模範となり、やがて他の州から来たひとりのスポーツ選手が、彼女の清さを見て、イエス・キリストの福音に興味を持ち始めたのです。彼女は、自分が自ら描いた理想の姿に向かって前進していることをよく知っていました。

2番目は、「きょうという日が人生を決める大切な日となるかも知れない」ということです。不世出の偉大なフットボールコーチと言われるピンス・ロンバルディは、どんなプレーでも決して気を抜くことがないように選手を訓練しました。こう説明しています。「どんな試合でも、勝ち負けを左右するのはほんの5つか6つのプレーだけなんです。でもそのプレーが試合を左右するプレーになるなんてことは、やっつる最中にはだれにもわからない。だからとにかく決して気を抜くことなく最後まで頑張らなければならないんです。」

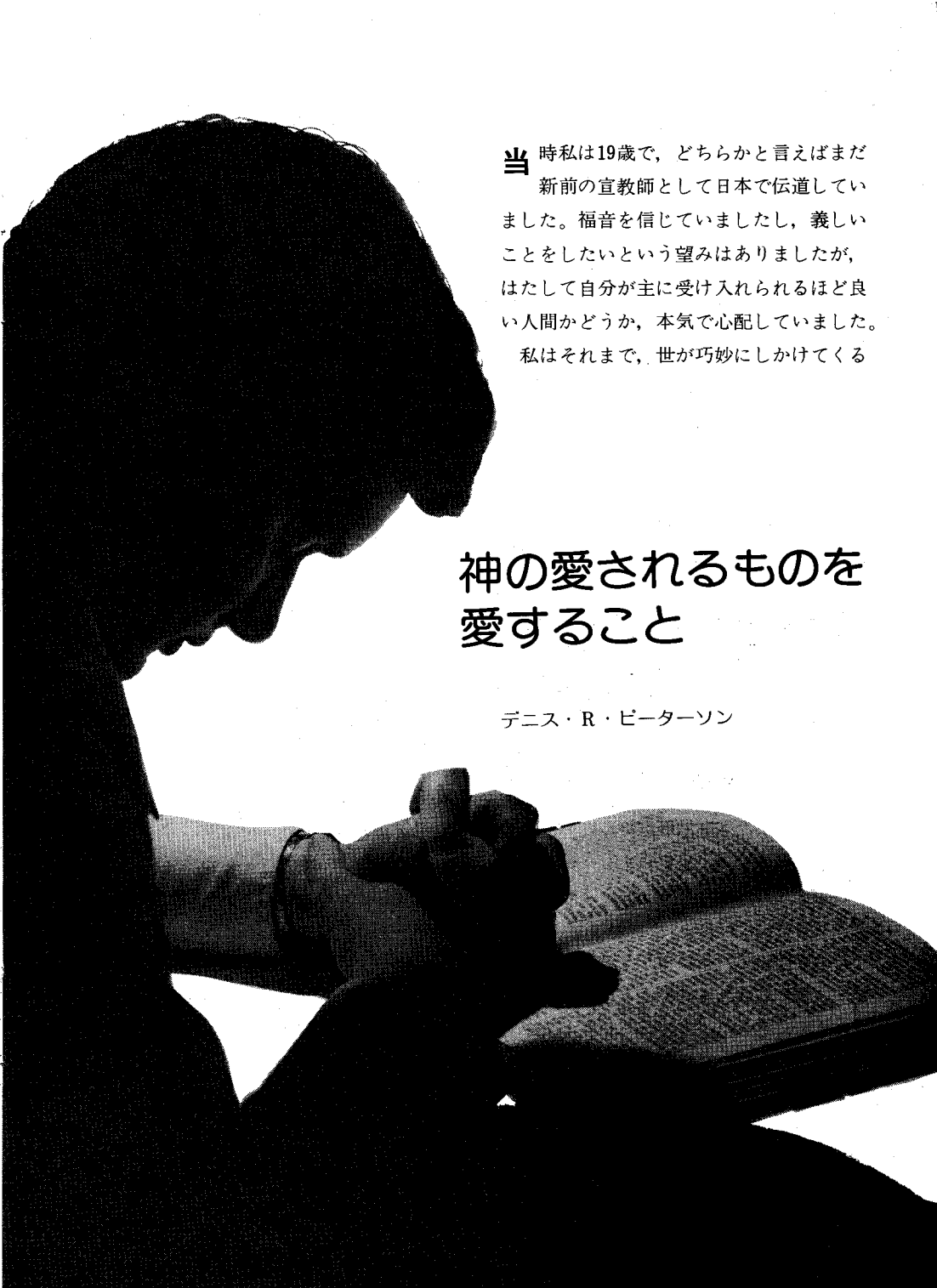
人生だって同じです。私たちの人生を左右する日はほんの5日か6日、いやそれ以下かも知れません。私たちの全身全霊を主イエス・キリストに捧げる日、時を越えて共に手を取り合う伴侶を見つける日、監督に「はい、どこでも召される所に行きます」と言う日です。そのような日はそう多く訪

れるものではありません。でも一日一日を精一杯生きていれば、そのような大切な日が訪れた時でも正しく対処することができ、やがてふさわしい人すべてに与えられる永遠の報いを受けるのです。

最後は、「あなたがその難問に取り組まなければ、だれも取り組む人はいない」ということです。私の高校にたくさんの問題を抱えた女子生徒がいました。家が貧しく、服装も奇妙で、いつも何かにおびえている風でした。ところが男子生徒の中に、そうした彼女にいつも温かいあいさつをする子がいました。ある日のこと、彼が彼女にこう言いました。「今度の歴史のテスト、一緒に勉強しようよ。」ふたりは一緒に勉強しました。彼女は彼が自分のことをひとりの人間として見てくれていることを知りました。

それから何週間か過ぎて、ある日彼女は彼にこう言いました。「あなたは私の命を救ってくれた恩人だわ。」彼には思い当たることは何もありません。彼女は言いました。「歴史のテストの時のこと覚えてる?」「ああ、覚えてるよ。一緒に勉強したよね。」「私、あの日……自殺しようと思ったの。この世に私のことを愛してくれる人なんかだれもない。私、ちゃんと知ってたのよ。みんなで私の服装のことやなんか笑いものにしてた。でも、あなたはそうではなかった。私が今こうして生きているのは、あなたのおかげなのよ。」彼女は今看護婦として、大勢の病に苦しむ人々のために献身しています。

今まで述べた3つのことについて、じっくり時間をかけて考えてみようではありませんか。そうすれば、何を語るべきか、何をなすべきかが見えてくることでしょう。



当時私は19歳で、どちらかと言えばまだ  
新前の宣教師として日本で伝道して  
いました。福音を信じていましたし、義しい  
ことをしたいという望みはありましたが、  
はたして自分が主に受け入れられるほど良  
い人間かどうか、本気で心配していました。  
私はそれまで、世が巧妙にしかけてくる

## 神の愛されるものを 愛すること

デニス・R・ピーターソン

利己心、高慢、不道德、権力、金銭欲の誘惑を見て、自分の弱さを感じていました。いったいどうすれば、こうした「人間的な」欲を抑えることができるのでしょうか。戒めを守ることが、自ら身動きできない分厚い服を着るような気がしてなりませんでした。そして、福音によって着せられた無理な姿勢のその服のはぎ目をサタンがちよきんちよきんと切っているような気持ちを覚えることがしばしばでした。

しかしそれも、ある発見をするまでのことでした。

伝道のいろいろな経験がそうであるように、その発見もある家族のおかげでした。同僚とふたりで宇野御家族の所へ初めて行った時、父親の態度に私たちはショックを受けました。彼は奥さんをののしり、かわいい男の子たちはびくびくした様子で父親を避けるのです。しかし彼は私たちの話を聞き、また来るように言って下さいました。それから5週間後、互いに福音について証をし合い、また宇野兄弟がかわいい子供たちと楽しそうに笑いながらすもうを取っている姿を見て、私たちは、涙を止めることができませんでした。

その晩同僚と一緒に帰りながら、この家族が永遠に結ばれる時のことを考えると、それまでに感じたことのないわき上がってくるような激しい喜びを感じました。そしてまた、もし自分がその場に一緒にいらなかったらと想像して、身の毛のよだつような怖さをも感じたのです。その時わかったのは、罪から遠ざかろうという自分の努

力がまだまだ足りないかもしれないということでした。私はその夜ひざまずき、義しい人になるにはどうしたらよいか教えて下さいと精魂を傾けて主に願いました。

私はその祈りを毎日、1週間、2週間と続け、伝道中もその後も繰り返し、答えを求めて聖典を読みました。やがてある朝、その答えがみつかりました。ジェームズ・E・タルメージ長老が「基督イエス」の中で、「主は罪のない御方であったが、罪を犯

---

キリストの完璧な防御というものが絶大な精神力によるのではなく、ただみたまに生まれたためサタンの汚れた手法を望まなかっただけであることを、私はついに理解しました。キリストは御父が愛されるものを受しました。

---

可能性はもっておられた。……キリストは罪を犯すことができなかつたと言っても、……外からの強制によるのではなく、たえず真理のみたまと交わっているという修養による、内からの抑制によるのである」（「基督イエス」p.155）と述べているのです。

それはまさに私にとって天啓でした。キリストの完璧な防御というものが絶大な精神力によるのではなく、ただみたまに生まれたためサタンの汚れた手法を望まなかっただけであることを、私はついに理解しました。キリストは御父が愛されるものを受しました。ですから、望みが行ないになつ

た時、その行ないはキリストの存在そのものの奥深くから湧いてくる自然な義を反映していたのです。

そこに鍵があります。神の愛されるものを愛すること、神の望みを自分の望みとすること、ひいてはそれが神に似た者となることなのです。私の悪かった点は、神と反対のことを望みながら、神に似た行ないをしようとしていたことでした。心の望みを変えさえすれば、行動は自然に神に似てくはずです。

私はそれまでに感じたことのない希望を感じました。もう一度聖典を開き、神の愛されるものが何であるかを知ろうとして、むさぼるように読みました。モルモンがそれを一語で説明しています。私が求めていたのは愛でした。「キリストの純粋な愛」でした。それは、「神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこらず与えたもうたこの愛で自分たちの胸を満すためにありたけの心をつくして御父に祈る時に、私にも得られるのです。またモルモンは、私に必要な次の約束も告げていました。「これはまた、あなたたちが神の子らとなるためである。……また私たちも神のように清められると言う望みを持たんがためである。」(モロナイ7：47—48)

ずらりと並んだ戒めや教えが一瞬にして変わるのを感じました。外側だけでなく気持ちや愛や望みをも変える力によって変えられたのです。

私は慎重に最初の目標を選びました。別に大きな目標ではありませんでしたが、少

少手ごわい問題でした。教会に出席するのがつまらなかったのです。そこで、朝夕こう祈ることにしました。「主よ、私が礼拝をあなたの感じられるように感じるができるよう祝福して下さい。礼拝の中にあなたの見いだされるものを見いだせるよう助けて下さい。あなたと同じような態度で出席できるように助けて下さい。」すると信じられないようなことが起き始めました。日曜日が光明に満ちた日となり、心から進んで教会員とあいさつを交わし、自分の証を語り、教師から学び、言葉に尽くせない気持ちを歌に表わし、謙遜な感謝の気持ちで救い主の犠牲のしるしにあずかる自分を発見したのです。日曜日が安息日になりました。以前のように、休んだり、読書や勉強やスキーや遊びをしたい欲求を無理やり抑え込んで教会へ出席するということがなくなりました。教会への出席が、愛による義しい望みの表現となったのです。

このささいな経験によって、また別の聖句が新たな意味を持ってきました。神権の教理が現実に私の心をうるおし始めたのです。「強いらるることなく」自発的に安息日を聖く守って聖霊が伴侶となるのを感じた時、神権の祝福が私に注ぎ込みました。

(教義と聖約121：45—46参照)この素晴らしい経験によって私の信仰は強まり、自分にとって難題だったものが次第に解決に向かっていくという希望がわいてきました。

もうひとつの課題は、一緒に働いているある人についてでした。私は彼に尊敬の気持ちが持てず、彼も明らかに私を軽蔑して

いました。ふたりの間はとげとげしくなり、彼は私の仕事をわざと妨害してけんかをしかけてきました。私も肉欲の人よろしくそれに応戦し、すぐに争いになりました。少少冷静になると、これでは自分がだめになる、この口論でたまは離れていったと気づくのでした。

そこで私はまた主に朝晩祈りました。

「父よ、私はあの人とうまく行っていません。あなたが感じられるような感じ方があの人に對してできるように、どうか祝福して下さい。」するとそれから間もなく、以前とはまったく違った見方でその人を見ることができるようになってきました。私は、感じやすく傷つきやすい人、新しい状況を恐れる孤独な人をそこに見ました。そして、彼がここに至るまでに伸ばしてきた数々の良さが見えてきました。それより何より、彼に對して次第に尊敬と、さらには畏敬すら感じるようになったのです。そこにいるのは、神から愛され、いつくしまれている神の息子でした。そういう人をだれが愛さないでいられるでしょう。とうとうやって来ました。愛が天から降り注いだのです。私の心のほんの片隅が変化して、主の約束が成就されたのでした。

私の経験では、その変化のために日に少なくとも2回主に祈って数週間かかったかと思えます。しかしとにかく変化は訪れます。「キリストを確く信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人とを愛して強くすすむ」ならば、喜びと平安の気持ちを持ち失うことはないのです(IIニーフ

アイ31:20)

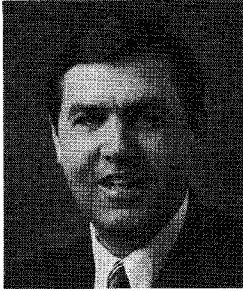
もし私たちが、永遠の御父が感じられるのと同じ喜びを人を愛することに見いだせたなら、あるいは自分の子供たちを御父の偉大な模範に従って尊重し、御父と同じ知恵を持って子供をしつけることができたなら、どんな奇跡が起きることでしょう。神の愛されるものを私たちが愛した時、お金や祈りや正直、労働、教会の召しなどについてどのように感じるのでしょうか。

ベンジャミン王の民が、たちまちにして「悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを」(モーサヤ5:2)持ったような、劇的な「大きい変化」を経験する人はまれであると思います。ほとんどの人はゆっくりと規則に規則を加え、戒めに戒めを加え、恵みに恵みを加えられた末に、「寛容であり、……情深い。また、ねたむことをしない、……高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」(Iコリント13:4-7)と言われる人になるのです。

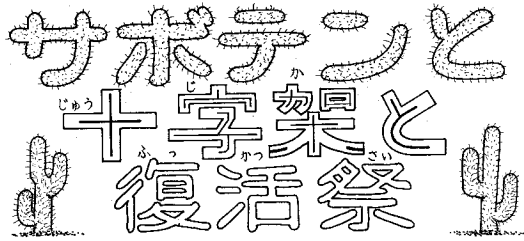
日の栄の王座と永遠の生命を受け継ぐ人たちは、善いもの、真実なもの、清いものを愛する心が自然に湧き出て強いために、たとえ死後の命がなかったとしても毎日そういうものを選ぶ人ではないでしょうか。そのような人々にとっては、天の家に帰ることは、永遠のこちら側で次の朝目をさますことのようにまったく自然なのでしょう。



# ちい とも 小さなお友だちへ



教会教育委員長  
ジェフリー・R・ホランド



**だ**れにも、どうしても助けが必要  
な時があるはずです。小さい時、  
私にもそのようなことがありました。  
近くの山で遊んでいた時です。私は、  
とげだらけの巨大なサボテンの中に  
落ちてしまったのです。その痛さと  
いったら、たとえようがありません  
でした。とげは、運動ぐつを、くつ  
下を、シャツを、そして体中をつき  
さしたのです。まるで投げ矢のま  
とになったような気分でした。

私は、山をもふるわせるような声  
で泣きさげびました。右にも左にも、  
上にも下にも動けずとにかくどうす  
ることもできない状態でした。動け  
ば、よけいにとげが深く入っていく  
ように思えました。じっとして泣い

ているより仕方がなかったのです。

その時、一番に助けにきてくれた  
のは、8歳になる私の兄でした。兄  
は、どうにも手のつけようのない私  
の姿を見て、びっくりしてしまいま  
した。それでも1本1本とげをぬき  
始めました。ぬく時には、ささる時  
よりももっと痛みます。私は、もっ  
と大声で泣きました。

とうとう兄は、自分の力の限界を  
知ったようでした。いくらがんばっ  
ても、とげは何百本とささっている  
のです。しかも、私は声を張りあげ  
て泣くばかりです。8歳の兄には、  
手のほどこしようがありませんで  
した。兄は、山をかけ下りると、自分  
の赤い荷車を引いて、また登ってき



をあげる私をサボテンの中から引っぱり出し、どうにか荷車にのせました。そして、近道を通って山を下りたのでした。

それからのことは、あまりよく覚えていません。確か、母が洋服をぬがせてとげをぬいてくれたような気がします。ただ、私の頭にはっきりと焼きついているのは、荷車を引っぱって走ってくる兄の姿です。あの

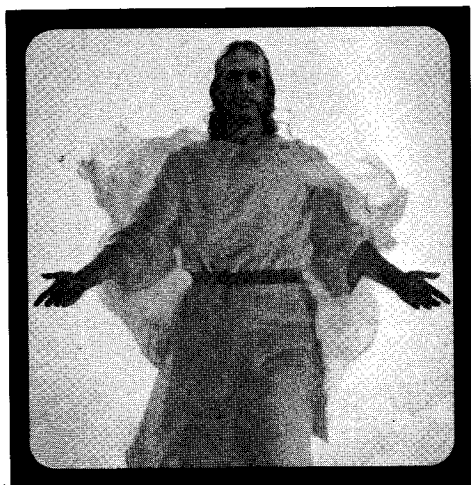
ました。私は、その時はもう死ぬかとおもいました。しかし兄は、悲鳴



姿は、一生忘れることがないでしょう。兄がいなかったら、私は死んでいたかも知れません。

復活祭は、私たちにとって記念すべき時です。(特に、私にとっては一年中で一番すばらしい日です)その時に、私たち一人一人は、苦しいことにつかっただれかに助けてもらった時のことを思い出す必要があります。それは、かわいがっていた犬

がいなくなったり、おもちゃがこわれたり、またサボテンの中に落ちたい





りした時のことではありません。もっと大変なことです。つまり、サタンに負けそうになった時のことです。もしその時に、だれもいなかったらどうでしょう。私たちは、そのまま、家族や友だち、そして私たちを愛して下さる天のお父様と永遠にはなればなれになって、だれもいない真っ暗な所に入れられてしまったかも知れません。

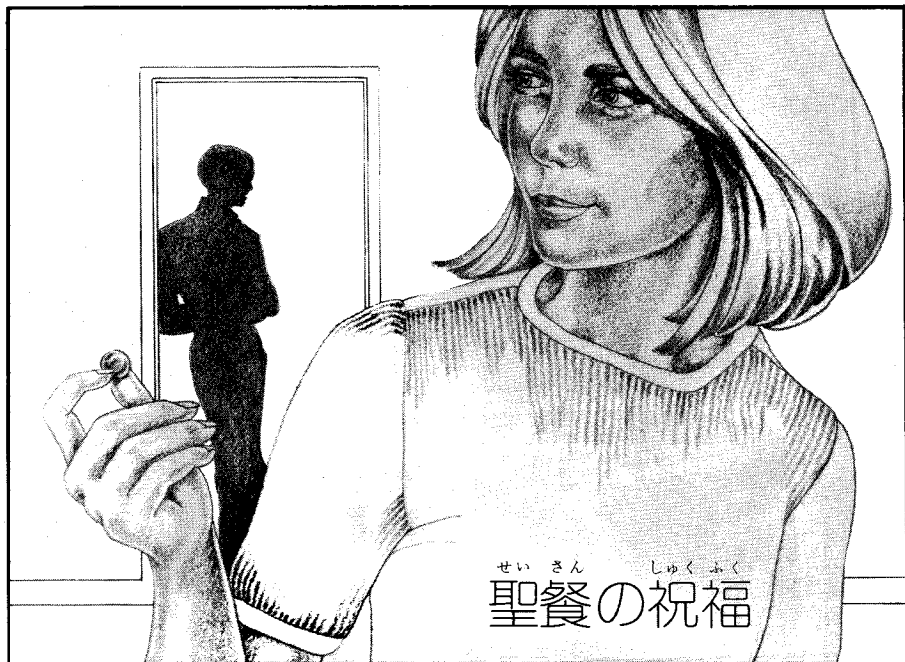
けれど、私たちのお兄さんであるイエス様は、サタンにまどわされなかったのです。イエス様は、負けませんでした。こうしてイエス様は、私たちを自由にする力を得たのです。このことについては、いくら年をとっても完全にはわからないかもしれません。暗やみの世界のとびらをあける力とかぎを持っておられるのは、イエス様だけです。イエス様は、その力によって人々を救い、家族とずっと一緒に住めるようにして下さったのです。また、天のお父様の所に帰れるようにして下さいました。けれど、イエス様は、そうするためにとても大きなぎせいを払って下さいました。十字架の上で苦しみを受けられたのです。あまり苦しかったの

で、イエス様でさえ自分はひとりぼっちだと思われたのでした。

そして、イエス様はおなくなりになりました。イエス様の死を悲しんで、山はふるえ、太陽は光をかくしました。けれど、その後、すばらしいことがおきたのです。死んだ人たちが、生き返ったのです。復活したのです。

春ののどかな日、イエス様は、よみがえって天のお父様のもとに帰って行かれました。そして、私たちにも同じ復活の力を与えて下さったのです。どのようにして復活するのかはわかりません。ただ、イエス様にたよれば、すべての悲しみやなやみ、そして死がなくなってしまうということは知っています。私にとって、復活祭とはこういうことです。

復活祭がきたら、毎日幸せでいることがどんなによいことか考えてみて下さい。そして、何よりも、私たちのお兄さんであるイエス様のことを考えて下さい。イエス様は、私たちの傷を治し、おそれを取り除き、みんなが幸せになれるようにこの地上に来られたのです。



せいさん しゆくふく  
聖餐の祝福

スーザン・ピエール

**兄** がどもると、何かいやなことがあったな、とすぐにわかりました。兄は、小さい時から上手に話せませんでした。小さい時は、それもかわいらしいのですが、8歳ともなると、へんだと思わないわけにはいきません。母は、あわてて兄を医者に連れて行きました。それからは、だいぶうまく話せるようになったのですが、ただ、心配なことがあったりするとどもってしまうのでした。そんなわけで、私は、兄がこわがたりおびえたりする時にすぐわかってしまいました。

兄は、祭司になって聖餐の祝福をすることをこわがっていました。したくないからではありません。聖餐の祝福の言葉をとちって、前にすわっている執事たちに、にやにやされるのがいやだったのです。

兄は、よく本を読んでいたので、ビー玉を使うこともそこからヒントを得たのかも知れません。ギリシャのデモステネスという人は、はつきりと話せるように、急な坂を上りながら発声したり、口に石をつめて話したりしたそうです。最初これを聞いた時、私はなんておかしな人だろ

うと思いました。でも、兄は、かなりまじめでした。石を口に入れると  
田にしかれるので、代わりにビー  
玉を使うことにしたのです。

私は、ビー玉を集めていました。  
遊び方などは知りませんでした、  
ただきれいなのでいつもながめてい  
ました。ある日、兄が私の部屋に來  
て、入口に立ったまま私の顔を見つ  
めていました。兄は、何か言いた  
いことがあるといつもそうしました。  
兄は、背が高く、やせていて短いか  
みをしていました。外で野球をする  
せいか、かみが本当に金色になって  
います。兄は、みょうな顔をして私  
を見ています。私は、ベッドの上  
にすわって、ビー玉を広げて見てい  
ました。

「スージー」とうとう兄が口を開  
きました。「ビー玉を5、6個、売っ  
てくれない。」そして、顔を赤くしま  
した。何か重大なことを言う時は、  
いつもそうでした。話し方を直す先  
生は、これはどもるのと同じ原因で、  
そのうちに直ると言っていました、  
完全には信用できそうもありません  
でした。

私がだまっているので、兄は考え

を変えたようすで言いました。「や  
っぱり、いいよ。別にどうってこと  
ないんだ。」

私は、赤いビー玉を取り上げると、  
光にすかして見ながら聞きました。  
「どうってことないのなら、どうし  
て買うなんて言ったの。」

兄は、何も言いませんでした。何  
か言えば、どもってしまうに違いあ  
りません。兄は、苦しそうな表情で  
私を見ると、部屋を出て行きました。

もちろん私は、後で兄にビー玉を  
持っていきました。6個ほど洗って  
かわかし、箱に入れて兄のベッドの  
上に置いておきました。

兄は何も言いませんでしたが、目  
が何か言っているように思いました。

それから、しばらくの間、私は、  
ビー玉のことについては何も聞きま  
せませんでした。でも、兄は、ひとり  
で何かしているようでした。兄の誕生  
日が近づいてきました。それと同時  
に、教会で聖餐の祝福があるたびに、  
私の目は兄の方にいくようになりま  
した。兄は、頭を下げて、とても熱  
心に聞いていました。私には、兄の  
気持ちがわかるような気がしました。

私が恐れていたのは、だれかが祝

福を間違えて言った時です。そんな時、兄は、いつか自分もそうなるのだと思って、大変ショックだったに違いありません。

ある日、階段を下りて行くと、何やらつぶやく声が聞こえました。それは、どうやら洗濯場から聞こえてくるようです。私は、しのび足で近づいてドアをあけてみました。兄です。兄が口にビー玉を詰めて立っていました。何を言っているのかわかりませんでした。兄は、話す練習をしていたのでした。

私はしばらくそこに立って見ていましたが、見つからないうちにドアをしめて部屋に戻りました。しばらくして下に行くと、もう兄はいませんでした。

それから何週間かして、兄は誕生日をむかえました。そして、次の日曜日、祭司に聖任され、聖餐の祝福をするように頼まれたのです。

あの時のことは、今でも忘れられません。私は、兄をじつと見ていました。礼拝堂の明かりに照らされて、兄のかみは光っていました。その時の兄には、美しいという言葉がぴったりでした。しかし、私の心臓は今

にも破れるかと思うほどはげしく脈打っていました。兄は、心配でふるえているに違いありません。

突然、兄が私の顔を、まっすぐに見つめました。その目には、私を安心させるような自信がありました。兄は、祭司たちがするようにひざまずいて、祝福の言葉を言い始めました。「永遠の父なる神よ、われら御子イエス・キリストの……」聖餐会で泣く人は、おばあさんたちを除いてめつたにいません。けれど、その日、私は涙を止めることができませんでした。兄の声は、それは優しく、しかも礼拝堂のすみずみまでひびきわたりました。それまで、あんなに美しい祝福を聞いたことがありませんでした。もちろん兄は、ひとつもとちったりしませんでした。

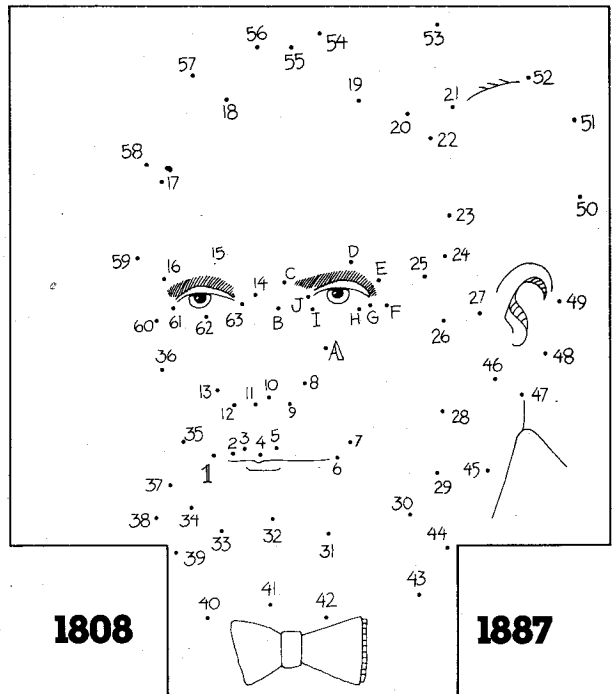
私は、ただもう、涙が出て仕方ありませんでした。兄が大好きになりました。その夜、私のベッドの上には、ビー玉の箱が置いてありました。

月日は、どんどん過ぎていきます。けれど、たとえ90歳になったとしても、私は、このビー玉を取っておきます。そして、兄の初めての聖餐の祝福の思い出も。

# ジョン・ テイラー

1808

1887



ジョン・テイラーは、教会の第3代目の大管長です。テイラー長老は1836年、奥さんと一緒にカナダで教会に入りました。それから、宣教師として長い間旅をしました。1844年のことですが、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスがカーセージのろうごくで殺された時、ジョン・テイラーもあやうく殺されそうになりました。テイラー長老が、敵の手から逃れようと窓際に走り寄った時です。一発のだんがんが、ジョン・テイラーのももをつらぬきました。続けてもう一発。それは、胸に当たりましたが、運よく胸ポケットに入れてあ

った銀の懐中時計に救われたのでした。

ジョン・テイラーは、69歳の時に教会の大管長になり、1880年から1887年までの間、そのつとめを果たしました。ちょうどその頃は、テイラー長老にとっても教会にとっても苦勞の多い時でしたが、テイラー長老は、いつでも愛と思いやりを持って、家族や人々に接しました。また、子供たちを両親と一緒にたびたび教会の集会に招き、穴のあいた懐中時計を見せてはその時の出来事を語りました。ジョン・テイラーは、人と交わることを愛する、ユーモアに富んだ人でした。

# おもちゃばこ



## ことりさがし

よしおくんが、「ひとりぼっちでさみしいな」と言っています。でも、よしおくんのまわりには、12わのことりがいるんです。さがして、色をぬってあげましょう。



## 虹の 向こうに

コンスタンス・ボルブ

**朽**ちかけた古い掘っ立て小屋に通じる、  
がらくたが散乱したほこりっぽい道を  
歩いていると、目の前を通り過ぎてゆくど  
うしようもない貧しさに私の心はふさぎこ  
んでいくばかりでした。小さなその家の屋  
根は片側が崩れていて破れた窓には古新聞  
が貼りつけられています。そして茶色の土  
で覆われた庭には割れたガラスの破片や錆

びた空缶などがらくたが散らばっていました。窓の向こうに、破れたレースのカーテンがだらりと下がっていて、すすけた壁と床が見えます。道を登っていくと、15匹から20匹の猫が私の前をさっと逃げて行きました。雨に打たれて白茶けたドアをたたく私の脳裏には、ブリガム・ヤング大学で味わったあの穏やかな生活がふつふつとよみがえり、平穏なキャンパスをなつかしむ気持ちもちが湧いてきました。でも今の私はプロボを遠く離れたところに住む看護学生。与えられた仕事を十分に果たせるかどうかさえおぼつかないような状態でした。

この発端は、数週間前の公衆衛生学の授業です。単位の中に実習が含まれていたもので、私はソルトレーク・シティで実習を受けようと計画しました。ところが最初の日に講師から、ある小さな町の保健所で職員を助ける看護学生が必要だという話を聞きました。私はすぐに志願しようと思いました。感情を抑えようとするのですが、どうしてもできず、そうしている内に私の足は新しい地での新しい仕事に向かって歩み出していたのです。

到着の翌日、私は保健所にいるふたりの公認看護婦に会いました。この辺りで公認看護婦と言えばこのふたりだけ。それは忙しいどころの騒ぎではありません。数百人分のカルテが入っているファイルを見ましたが、皆何らかの加療が必要な人ばかりです。恐れをなした私は、詳しく見ている暇

などないことを知りました。ただ飛び込んでみて、あとは運を天に任せるだけです。

担当の人が私に3人の患者を割り当て、私の顔をじっと見て、こう言いました。「もうひとりの患者がいるのですが、あなたにはちょっとどうかなと思っているのよ。」彼女は厚い黄色のファイルを手を持っています。

「このおばあさんは重病なんだけど、治療を受けたがらないの。もう2年も拒み続けているかしらね。私もほんと手を焼いているの。もしあなたがやってみたい、そして失敗してもがっかりしないって約束できるのならお願いしようと思うんだけど。」私はまだ一度も会ったことのないそのおばあさんに同情心を覚え、これは自分がしなければいけないと思いました。

ファイルに目を通すと、彼女は今70代の後半で、数年前に事故で右足を悪くしていました。骨は折れなかったのですが、大切な血管と筋肉が損傷を受けて切れていました。治療は受けたものの、足の先の方への循環がうまくゆかず、時々、血流がとどえ、老廃物がたまり、周囲の組織を圧迫するのです。そのためまわりの正常な組織が壊死し、足がただれてきていました。

このような状態に悩んだ彼女は、結局医者の方へ診てもらいに行きました。ところがその医者は良い人だったのですが荒っぽくて配慮が足りませんでした。そんなわけでおばあさんはすっかり病院を怖がるよう



になり、二度と医者にはかかるまいと心に決めたのです。その医者の治療も途中までしかできなかつたために、足は痛み始め、細菌に冒され、動かなくなつてしまいました。潰瘍が広範囲に広がり、鮮血と黄かつ色の膿が吹き出て、あちこちで肉が腐りかけていました。

おばあさんは全く世捨て人同然で、世の中との唯一の接触と言えば、手間賃をあげて使い走りや買い物をしてもらっている隣家の少女しかありませんでした。手伝おうとする人はほかにもいたのですが、おばあさんの方で怖がってだれにも会おうとしないのです。

私が初めておばあさんに会いに行った日は、正直言ってまだ会う準備ができていなかったと思います。腰の曲がった病気のおばあさんが、長い白髪をぼさぼさに垂らして足を引きずりながら玄関のところをやってきました。私はかろうじて自己紹介だけはしましたが、看護婦はいらないから、放っておいて欲しいと断られました。だからと言って引き下がるわけにはゆきません。こうして彼女の家に行った間、確か以前に一度だけ嗅いだことのあるにおいがつきました。決して忘れられないにおいです。彼女は壊疽にかかっていたのです。

私の担当者はその診断を確認すると、私を担当から外そうとしました。おばあさんの命はあと数週間かもしれないので、学生が担当している間に死亡したりすると郡検

事から尋問を受け、看護婦としての能力を問われることになりかねないというのでした。担当の方はその責任をこれからは自分が引き継ぐとおっしゃいました。しかし、私はどうしてもあのおばあさんがあれほど苦しみ、そして寂しい状態で一生を終えるなんてとても許せませんでした。そこでもう1週間頑張ってみますからとお願いしました。驚いたことに彼女も快く承知して下さいました。

2度目の訪問の日、おばあさんは私を中に入れてくれました。私たちはありとあらゆることを話しました。でも、とうとう病気のことは切り出せませんでした。私はその日、家に帰って泣きました。助けが必要であることをおばあさんにわかってもらうなど、とてもできないと感じたのです。

3日目に、私は、手当てを受けないと死んでしまうということをはっきりとおばあさんに伝えました。ところがそれも意に介さない様子でした。この世に執着する理由もなかったのでしょう。

私のはがっかりしてアパートに帰りました。彼女が助けを拒んでいる以上、自分に何ができるでしょう。祈るしかありませんでした。おばあさんのことは前にも祈っていましたが、この日は同室の人も心配して一緒にひざまずいて祈ってくれました。私たちは共に知恵と導きを求めて主に熱心に祈りました。

その後数日間は、何事もなく過ぎました。

私は信仰を持てるように努力し、毎日祈り続けました。そして5日目にその答えが返ってきました。突然、何をすべきかがわかったのです。別に声を聞いたわけでも示現を受けたわけでもありません。人から言われたのでもなければ、自分で考え出したわけでもありません。ただどうしたらよいかははっきりわかったのです。

私は計画を立て、おばあさんの家へ急ぎました。持参した泡の立つ過酸化水素を見せると、おばあさんは目を輝かせました。おばあさんはすっかり気に入ったようで、病院でもこんなに痛くない治療をしているのかと聞きました。私は、できるだけ気持ちよくいられるように病院は細心の注意を払ってくれますと太鼓判を押しました。それから病院へ行って、医者をおんなに怖がっていたおばあさんがもうじき入院するかもしれないと話しました。

その翌日は週末でプロボに帰らなければなりませんでしたが、私はおばあさんと別れたくありませんでしたが、お隣のお母さんが優しい親切な方で、できる限りお手伝いをしますと約束して下さいました。

プロボから帰ってみると、この年老いた私の友人は勇気をふるい起こしてすでに入院をすませていました。保健所の皆さんも大喜びでした。病室に駆けつけると、おばあさんはさっぱりした明るい笑顔で私を迎えてくれました。「病院に来ましたよ。あなたのおかげです。」そして私に、どの教会に

行っていますかと聞かれました。私が末日聖徒です、と答えると、おばあさんはこう言いました。「知ってました。いらした最初の日から、あなたが特別に私のところに送られてきた人だってわかっていましたよ。お顔には、あなたの教会の方たちが持っている同じ輝きがありました。一目であなたが信じられましたよ。」

この時の全身に広がるような喜びを想像してみてください。神は人々が2年をかけてできなかったことを1週間でなさいました。私はこれほどの安らぎをこれまで経験したことがありませんでした。おばあさんの足は3カ月で完治しました。同じ地域の末日聖徒のワード部の会員たちが奉仕活動としておばあさんの家を修理し、庭の手入れをしました。宣教師がおばあさんを訪問し、間もなくおばあさんはバプテスマを受けました。

現在、おばあさんは扶助協会をはじめ日曜日の集会に欠かさず出席し、生活には楽しみがよみがえってきました。天父の娘であるこのおばあさんを知り、愛するようになったことを、私は本当に感謝しています。私はおばあさんとのことから、信仰を持ってたゆまず努力するなら、虹の向こうに美しい楽園を見いだすことができることがわかりました。皆さんも同じように努力するならば、必ず素晴らしい経験を味わうことができるに違いありません。



## 卒業式に思う

七十人第一定員会会員  
ディーン・L・ラーセン

さほど以前のこともないが、私はひとりの若い男性と面接をした。彼は伝道に出ることが希望だったが、十代の時に幾つかの重大な過ちを犯していた。彼の家族は活発な末日聖徒であり、彼自身、罪を犯していた時でさえ、教会の活動には活発に参加していた。結局、彼は監督のもとに行き、自分の罪を告白した。そしてそれから

1年以上の間同じ過ちを繰り返さなかった彼は、伝道に出ることを心待ちにしている。

私は彼からこれまでの経過と、彼がなぜ過去において教会員としての資格を問われるような判断をしてしまったのかを尋ねた。その時、彼の口から出た言葉はこうだった。「ええ、私も自分のしていることが悪いことだということは承知していました。でも

いつかは正しい生活に立ち返って、伝道に行くんだという自信はありました。」

私は生活をおるべき姿に戻し、宣教師として主に仕えたいという彼の願いをうれしく思った。しかしその反面、正しい道を捨てて、危険で不道徳な行ないにふけるといふ選択を自分に許しておきながら、その挙句が、まるで初めから決めてあった予定表に従うように、従順への決意を新たにしようというあまりにも計画的で打算的な生き方には当惑させられた。

もしこの青年とのこと以外に、私がこの種の経験をしたことがなかったというのであれば、こうして特筆するには及ばなかっただろう。しかし残念なことに、これは珍しいことではないのである。いつまでも続ける気持ちはないが、少しの間楽しむだけならという気持ちで、世の禁じられた事柄にちょっと手を染めてみるという風潮と誘惑が若い人々の間に広まっているようである。まるでそういった事柄の中に、決して見過ごしにできない大切な、あるいは心を引きつけるものがあるとも考えているようだ。

こういった禁じられた領域に道をそれても、立ち直る人が多いというのはひとつの事実だが、その一方では、悲劇的な出来事もその数を増し、多くの人々の生活に挫折感と失望を与え、いつまでも消えることのない傷跡を残しているのである。事が自分

だけで済むというような罪は存在しない。たとえ初めから計算ずくで故意に罪を犯すというようなことがあったとしても、その人にそこから生じてくる結果まで決定する力はないのである。もしこれを信じない人がいるなら、これまでサタンがずっと行なってきた狡猾としか言いようのない欺きの好餌となるであろう。

最近私は地元の高校の卒業式に出席する機会を得た。前もって決められていた生徒たちが同期生の前に立ち、大人の世界への門口に立った彼らの前途に待ち受ける遠大で素晴らしいチャレンジについて、思うところを述べた。大人の話し手たちも現代の若人の美点と潜在能力をほめたたえ、将来彼らの手で様々な限界と呼ばれているものが超越され、科学がその支配する領域を広げ、難病の治療薬が発見され、国家間、人間同士の関係が前進を見、やがて地上に恒久の平和が訪れるという意味のことを話した。人を鼓舞し、奮い立たせる話であった。

私はその祝典的印象的な話に耳を傾けながら、そこに集まった若い人々に向かってあるひとつのことを話したいと考えている自分に気が付いた。彼らのほとんどが末日聖徒で、その家族が彼らの成し遂げてきたことを誇りに思っていることも知っていた。またその内の何人かが卒業式の後でどのようなことを計画しているかも知っていた。私がおの卒業生たちに話したいと思ってい

たのは、彼らが人類のために多くのことを成し遂げるかもしれないというような遠い先の話ではなく、今この場の事柄についてであった。私はこう言いたかった。「私は皆さんが来年何をするか、あるいはその先に続く人生の中で何をするかということについてはそれ程心配しておりません。私が心配しているのは、皆さんが今晚、あるいはあした何をするかという点です。皆さんの予定はどうなっていますか。どこへ行く予定ですか。今晚何をするつもりですか。」

私は今こうしてこの記事を書いているが、他の同年代のグループと同じように、あの卒業生たちの中にも卒業式の後で、わかっているながら、また計画的に、自分自身だけでなく家族や教会、ひいては天父をも侮辱するような状況の中に身を投じた者たちがいたことを知っている。彼らはずっとそれを続けるつもりでそれをしたのではなく、単なる戯れ、一時のスリルとして、また冒険心からしたのであった。しかし、次第次第に蓄積されていくその影響力は破壊的なものである。その結果、やがて彼らの人生だけでなく、彼らを愛し信頼している人々の人生にも、悲しみに満ちた全く予測のつかない影響が出てくるのである。人間性は覆いようもない程に低下し、人によっては決して立ち直ることのできない所まで墮落してしまう。そして何かを失ったことを全人類が感じる日が訪れるのである。

自分に知らされている真理に忠実で、また時代の流れに押し流されることのなかった人に対して、私は心からの賞賛と感謝の気持ちを呈したい。皆さんは私たちの輝く希望であり、私たちは実に多くのことを皆さんに負っている。皆さんは最後の段階で他の人々とは全く異なった存在となるであろう。皆さんは世を覆う悪に対抗する最後にして最強の牙城である。また皆さんは自分に何のやましいところもないことを証明した。皆さんには何の汚れも認められない。神の祝福が皆さんの上にあるように。

私はこの神権時代の主の民に与えられた主御自身の次の言葉を読むにつけ、戦慄を覚える。「そもそも今は警めを告ぐる時にして、多くの言葉を費すべき時にあらざるなり。主なるわれは、末の世に於て欺かれざればなり。」(教義と聖約63:58)

私たちの前途に思いをはせる時、主の約束の言葉は希望を与えてくれる。しかし私はどっちつかずの妥協が横行しているのを見るたびに、主が私たちに与えられた警告の言葉に心をおののかせるのである。

若人の皆さん、主が与えて下さった真理に忠実になろうではないか。なすべき義務を果たし、私たちにかけられている期待にこたえようではないか。そうしてこそ私たちは、世の民とは異なった優れた人物となることができるのである。

# 生きている什分の一

キース・ムーア

**何**年か前は、什分の一を払ったらやっていけないと思い込んでいたもんです。自分は貧乏なので、神様は大目に見て下さるのではないかと思いました。そんなふうに考えていて、ますます貧乏になっていくばかりでした。

私は福音を信じていましたし、ワード部で働いてましたが、什分の一を払わないと何かすっきりしないというしるめたさみみたいなものを感じてました。それでやっと監督の家まで5ドルを持って行ったんです。郵送料が払えなかったものですから直接届けに行きました。5ドルは1パーセントにもなりませんでしたが、まず手始めでした。翌月は監督に10ドル渡しました。それから何か月か、5パーセントの「什分の一」を払い続けたんです。

それから私は自分の経済状態を見直してみました。すると毎月銀行の収支勘定が足を出さないんです。前だったら、毎月赤字になって手数料を払わされていたというのにです。

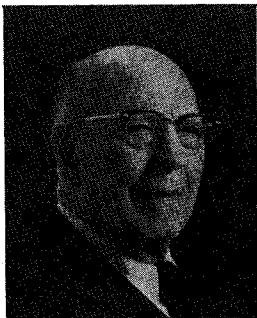
什分の一を10パーセントに引き上げてから2、3カ月すると、仕事で入る収入は1銭も多くならないのに、月々意外なほどのお金が通帳に残っているのに気がつきました。出費は前と変わらないんです。どっちなかと言えば、ささやかなぜいたく品を買う知恵がついた分だけ逆に出る方が多かったと思うんですが、とにかく銀行の口座に

はかなりたまりました。そんなことは前の年にはなかったことです。

什分の一を払ったら、翌日早速奇跡が起きたという話は説教壇からよく聞いてます。その話をばからしいとは思いませんが、私の場合は、什分の一を3回払った翌日に、目の玉が飛び出るような請求書が送られてきたんです。私が忘れていたのか覚えのない借金でした。その時はさすがにがっかりきて、什分の一を払ったことを悔やみたい気持ちになったもんです。それ以来今まで請求書がたくさん来て、什分の一をしゅったり、返してもらいたいと思ったりしました。それなのに、返済をすませてもまだお金があって、ちょっとした物を買う余裕があるんです。什分の一という霊の律法はちゃんと生きているんですね。

貧乏でお金の不安がある人たちに喜んでアドバイスしたいと思います。什分の一全部でなくていい、「少しでも」監督の所へ持って行きなさい。それから毎月、少しずつ多く払って行くんです。そして全部の什分の一を払いなさい。あなたの問題は必ず解決の方向に向かうと信じます。その通りなんですから。邪魔物があるかもしれないし、疑う気持ちが出てくるかもしれないが、負けてはだめです。がっかりしてちゃ、いけません。何か月かすれば、きっと「ごたごた」とはおさらばです。すぐに什分の一がきちんと払えるようになって、心の平安が持てるようになります。



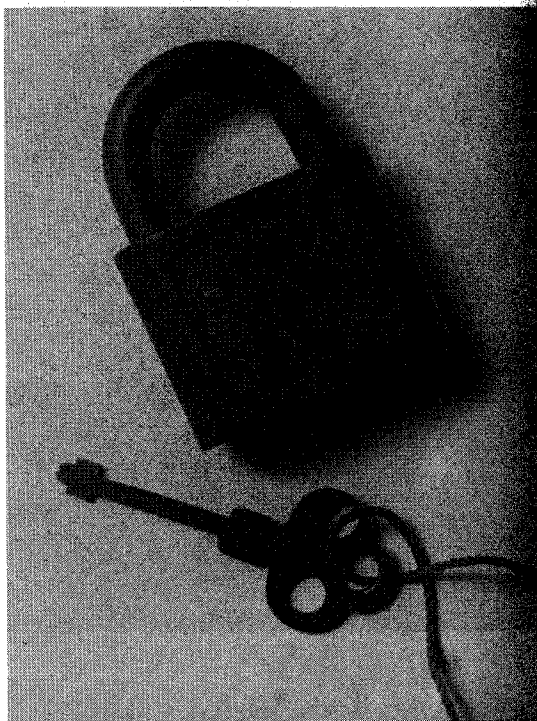


# 宣教師になる

十二使徒評議員会会員  
リグランド・リチャーズ

**私** たちはだれでも自分の友達の生活に影響を与えているので、望むならば素晴らしい宣教師になることができます。私たちの周りに住んでいる教会員でない人々で、教会に入るように招待されていない人がひとりもいないようにしなければなりません。しかし実際には、私たちの隣近所には教会に入るように誘われたことのない人が大勢います。

私は数年前、教会の責任でネブラスカ州のオマハを訪れたことがあります。ウインタークォーターズに架けるモルモン記念橋の起工式に出席するためです。私はそこで地元の伝道部の地方部長をしている人と会いました。彼はこれまで17年間もソルトレーク・シティーに住んでいて、ユニオン・





パシフィック鉄道の事務局に勤めていましたが、事務局の移転に伴いオマハにやってきたそうです。彼が教会に入ったのはソルトレーク・シティーではありません。オマハに来て、宣教師に会ったのです。私は彼に、「どうしてソルトレークで教会に入らなかったのですか」と尋ねました。すると彼は答えました。「だれも私を教会に誘ってくれなかったからですよ。」

ある時、私はひとりのステーキ部長とニューメキシコ州のファーミントンまで車で行きました。その時、同乗した伝道部長はユタ州のオグデンに12年間も住んでいたのですが、だれからも福音について教えられませんでした。私は彼に尋ねました。「どうしてオグデンで教会に入らなかったのですか。」「だれも私を教会に誘ってくれなかったからですよ。」

数年前、私はワイオミングを訪れた時にこの話をしました。するとそのステーキ部長が、監督をしていた時に会ったひとりの兄弟のことを話してくれました。ある日、彼の地域に住んでいる男性から電話がかかってきました。「監督、私は教会員になれるでしょうか。」「その時、私たちはまだ一度も彼を教会に招待していなかったことに気付いたのでした。そこで私たちは金曜日の夜にバプテスマ会を開くことを決めました。それから私は同じ地域に住むひとりの女性に電話をし、こういう人が教会に入ったのだが、あなたも教会に来てみてはいかがですか、と尋ねました。すると彼女はこう答えました。『監督、実を申しますと、



私もあとどれほど一緒に住まわせてもらったら、あなたが私を教会に誘ってくれるのだろうかと考えていたのです。」

皆さんは、この福音の門戸を開くために年をとる必要があるとか、19歳でなければならないということは決してないのです。自分の友達をワード部や、セミナリーの活動に招待し、それから彼らを宣教師に紹介して、宣教師が訪問できるように約束をとればよいのです。皆さんがこれから行なうことで、主のみ手の中で器として働き、人を教会に招くことほど大きな喜びと幸福をもたらすものはこの世にないでしょう。

主は次のように言われました。「而して汝らも生涯今の世の人々に向けて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの喜び如何ばかりぞや。」(教義と聖約18:15)

以前、南部の州を訪問していた時、私は主のみこころを知るような経験をしたことがあります。私はアリゾナ州のフェニックスに住むある立派な兄弟から手紙を受けました。かなり年配のこの兄弟は、自分の祖父が1840年にミシシッピ州でバプテスマを受けた最初の改宗者のひとりであることを述べ、手紙にこう書いてきました。「それ以来、その子供や孫たちの宣教師としての活動の年月を合計すると100年以上にもなります。」当時、その家族からは15人が伝道に出ていましたが、そのうち3人は私たちの伝道部で働いていました。

その老人の祖父が改宗してからちょうど

100年目に当たる1940年に、私は管理監督に召されました。そこである宣教師大会でその話をしたところ、たまたまその老人の孫に当たる人が出席していたのです。私はそのことを知りませんでした。集会が終わった後、その宣教師は私のところにやって来てこう言いました。「リチャーズ兄弟、今年で165年間の伝道になります。」大勢の孫やひ孫たちが一度に何人も伝道に出るとしたら、宣教師としての奉仕年数が新たに100年加えられるのも時間の問題でしょう。

私はこう思います。1840年の昔にミシシッピ川の沼地を歩いて渡り、しかも財布も袋も持たずに、多くの者がマラリヤ熱に倒れるといった状態の中で、わずかひとりの人を教会に導いたとしても大したことをしたとは考えてもみなかったと思います。しかし、その兄弟と子供たちはこの100年間に通算165年に及ぶ伝道活動を行なってきました。それもその兄弟が改宗した人々、またその改宗者たちを通じて改宗した人々の働きは数に入れていないのです。これほどの奉仕を行なうこと以上に、「虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえる」(マタイ6:20)方法がほかにあるでしょうか。

軍隊にしようが、伝道にしようが、あるいは友達と一緒にしようが、この素晴らしい真理に耳を傾けるよう人々を招くために、何かを語り、何かを行ない、道を開いていく機会は、日々私たちの前に横たわっています。私は常々、この世の中で主を愛

する心の正直な人ならばだれでも、この教会がどういうものであるかわかったならば必ず改宗すると申し上げてきました。私は、この教会で教えていることが、確かにイザヤが言う「不思議な驚くべきわざ」であり、「彼らのうちの賢い人の知恵は減び、さとい人の知識は隠される」ものであると思います。(イザヤ29:14参照)もし私たちが人人の関心を得て、この教会がどういうものか十分に説明することができるならば、人人は必ず教会に加わることでしょう。

この教会をジグソー・パズルにたとえてみましょう。絵の断片をばらばらにテーブルの上に置いて、一枚一枚の断片に描いてある絵を全部見ても、一体何なのかよくわかりません。それがキリンの首であったり、象の鼻であったり、納屋の裏側であったりします。ところがそれがぴたりと合うと、美しい絵柄ができます。そして一度完成したパズルは、たったひとつの断片でも取り出してしまうと、絵柄が崩れてしまうのです。

モルモンの教えについてあちこち断片的にとらえただけでは、皆さんはそれが一体何なのかわからないでしょう。しかしそれがひとつとなつて結合した時には、だれも、何もそこから取り除くことはできないのです。

ずっと前のことですが、私はデビッド・O・マッケイ大管長から聖職者のグループに話をする責任を受けたことがあります。あるふたつの教会がソルトレークで大会を開き、カリフォルニア、オレゴン、ワシ

トン、アイダホ、ユタそしてネバダからそれぞれの教会の指導者が出席していました。私は彼らの要請に応じて、モルモンの教えとはどういうものかということについて2時間半ほど話をしました。話の結びに、私はこう述べました。「私が教会の管理監督であった頃、教会の建築プログラムの責任を受けていました。私たちはロサンゼルスに神殿を建設する計画を立てました。ある日、その設計図を、大管長に見せました。まだ電気や配管工事の計画が済んでいませんでしたが、それでも設計図は84ページにも及び、縦120センチ、横80センチの用紙に数字や図表がびっしりと書き込まれていました。神殿は計画としては完成しました。しかし、工事は全然始まっていません。そのような状態で建築家がなすべきことは、その設計図を読み取って施工する方法を知ることです。84ページの中の25ページを省いて、建物を完成させることはできません。

皆さんはこの建物の設計図を持って世界中を回り、どの建物に合うか試してみることもできます。しかし、合う建物はひとつしかありません。ロサンゼルスにあるモルモンの神殿なのです。もちろん、電気の配線、配管、セメント、材木などロサンゼルス神殿と似た資材を使っている建物は数多くあるでしょう。しかし、その設計図がぴったり合う建物はひとつしかないのです。」

それから私は聖書を掲げてこう言いました。「ここに主の設計図があります。イザヤは、主が終わりのことを初めから告げて言う」と述べています。(イザヤ46:10参照)理

解の方法さえわかれば、この聖書からすべてを知ることができるのです。

そこで主の設計図が描かれているこの聖書を持って行って、全世界のどの教会に合うか当てはめてみて下さい。それがぴったり合う教会はひとつしかありません。それは末日聖徒イエス・キリスト教会です。もちろん、この主の設計図にある幾つかの部分を持っている教会は数多くあります。しかし、それがぴったり合う教会はひとつしかありません。」

そう言って私は少しずつ説明を始めました。聖書のいろいろな聖句を取り挙げてみました。その内のひとつを挙げて説明してみたいと思います。救い主はヨハネ10：16で次のように述べています。「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」

私は牧師たちに尋ねました。「どなたがこの聖句がなぜ聖書の中にあるか御存じですか。全世界の教会の中で、この聖句がなぜあるか知っている教会はどこにあるでしょうか。」それから私はこの聖句をヨセフに与えられた約束と結びつけて話しました。永久の丘の頂に建てられる新しい地についての約束です。(創世49：26参照)

モーセはこの新しい地を説明する時、「尊い」という言葉を5回も繰り返しています。(申命33：13—17参照)そこで私は尋ねました。「皆さんはこの地がどこであるか知っ

ていますか。」そう言って私は、それがアメリカ大陸であることを説明しました。またその後で保存されてきたふたつの記録について述べました。(エゼキエル37：15—20参照)「皆さんの中でヨセフの記録について知っている人はいますか。またそのことについて聖書の中で述べられているのはなぜでしょうか。」私は、救い主がこのアメリカ大陸のニーファイの民を訪れられた時、ニーファイの民こそ救い主が述べた他の羊であるとされたことを説明しました。主は、他の羊がだれか弟子たちに告げるよう御父に命じられたことはこれまでなかったと語っておられます。囲いにいない他の羊がいるとおっしゃっただけでした。(IIIニーファイ15：11—24参照)

もし私たちがこのことを認識するならば、予言者がなぜこれを「不思議な驚くべきわざ」(イザヤ29：14)と言われたか、その完全な真理がわかると思います。この地上にあって皆さんが行なう事柄の中で、人々に真理を知らせること以上に大きな喜びをもたらすものはないでしょう。私たちは伝道活動を通して絶えずその経験をしています。

アイダホ州で改宗したひとりの女性がいいます。彼女はしばしば私に会いにやってきます。ほとんど大会ごとに私を訪れます。看護婦である彼女は小児病院のために500ドルの小切手を差し出しました。それは、彼女の夫が亡くなった時、聖徒のひとりが彼女のもとを訪れて、真理を知ることによって何が得られるかを教えてくれたからです。最近彼女から受け取った手紙の中に、

この教会にはこれまで自分の人生で味わうことのできなかつた愛、母親の愛にもまさる愛があることを知ったと書かれていました。

またアラバマ州に住むひとりの女性はこう書いてきました。彼女は未亡人ですが、品のある素晴らしい女性でした。そんな彼女に宣教師が真理をもたらしたのです。彼女は手紙の中で、長老たちから福音を聞いて以来味わってきている喜びは、これまで経験したことのないようなものだったと書いています。彼女は今、教会で素晴らしい務めを果たしています。私たちはこのような報告を絶えず受けています。

皆さんは、この教会に改宗してアメリカにやって来たスカンジナビアの兄弟についてのグラント大管長の話を知ったことがあると思います。この兄弟は最初、教会について詳しく教えられていませんでした。そこで監督は彼のところに行つて什分の一の律法について教えました。彼は、什分の一を納めることを承諾しました。次に監督は断食献金を納めてもらいたいと考えました。彼は断食献金にも快く応じました。次に、礼拝堂の建築資金が必要になってきました。彼はその資金が什分の一から来るものだと思っていました。しかし監督の説明が終わる前に彼は礼拝堂の建築資金を払いました。続いて監督は、息子を伝道に出すように言いました。彼は、「それはちょっと度が過ぎるのではないのでしょうか」と答えました。監督は次のように言いました。「兄弟、自分の家族を除いて、この世の中であなた

が一番愛している人はどなたですか。」彼はしばらく考えていましたが、こう答えました。「恐らく私が愛しているのは、真夜中の太陽の国にやって来て、イエス・キリストの福音を私に教えて下さったモルモン長老だと思ひます。」監督は言ひました。「兄弟、それじゃあなたがその宣教師を愛すると同じように、だれかがあなたの息子さんを愛するとしたらどうでしょうか。」「監督、あなたにはまいりました。息子を伝道に出して下さい。」

皆さんはこの伝道の責任から逃れることはできないのです。

以前、私が初めて伝道に出た時、アンソン・H・ランド伝道部長は私たち宣教師に次のように言ひました。「心を高慢にして、自分が人よりも立派であるから愛されているのだと思つてはなりません。人々が皆さんを愛するのは皆さんが特別なものを託されているからです。」私はその時、ランド伝道部長が何を言おうとしていたのかよくわかりませんでした。しかしオランダの地を離れる前に、私はその意味を知ることができました。伝道を終えてオランダの地を離れる時私は数年前に家族と別れた時の数千倍の涙を流しました。

私は同僚と一緒に、私が最初の宣教師として福音を宣べ伝えた家を訪れました。その家の背の低い夫人は、エプロンにこぼれ落ちる涙をぬぐおうともせず、私の目をじっと見てこう言ひました。「リチャーズ兄弟、2、3週間前にアメリカに旅立つていった娘を送り出す時つらかつたですが、

あなたを見送るのはもっとつらいですよ。」その時私はランド兄弟が、「人々が皆さんを愛するのは皆さんが特別なものを託されているからなのです」と言った意味がよくわかりました。

私はまた、軍服を着て立っているひとりの男性のところへ歩いて行って、「さよなら」を言いました。彼は背が高く、少しあごひげをはやしていました。彼はひざまずいて、私の手を取り、しっかりと握りしめ、口づけをしました。その時、人々が宣教師を愛するようになったと言ったランド兄弟の言葉の意味がわかったような気がしました。

自分のこれまでの人生を振り返ってみれば、私たちは皆、この教会に在ることに対して宣教師に何らかの借りを受けていることがわかります。そのような私たちが、なぜこの福音を人に伝えていく責任を果たそうとしないのでしょうか。

私は皆さんに申し上げたいと思います。皆さんはこのみ業が神のみ業であると証しますが、それは同時に何かを行なうことも含むということです。

五旬節の日の後、ペテロは群衆の前に立って説教をしました。群衆はその説教を自分の国の言葉で聞きました。彼らは強く心を刺されましたが、それはペテロの説教を形造っている哲学によってではなく、イエスがキリストであり、生ける神の子であるというペテロの証によってでした。

私は宣教師たちに、伝道地に行ったら、主が彼らの心の内を燃やす時以外は、イエスが贖い主であり、ジョセフ・スミスが主

の子言者であり、モルモン経が真実であると声を挙げて証をしてはならないと助言をします。もし彼らが主のみたまと共に証を述べるならば、彼らの言葉はやかましい鐘や騒がしい鏡鉢にようはちとはならず、正直な人々の心を貫くものとなり、彼らは皆人々をこの教会へ導く器となるに違いないからです。

大分前のことですが、私はニューヨークに住んでいたことがあります。そこで会った聖徒たちに私は、大管長はすべての会員が宣教師になるように望んでおられますと言いました。「さて皆さん、皆さんが知っている人で教会員でない人、一緒に働いている人、隣人、友人そして親戚の人々のことをしばらくの間考えて下さい。皆さんが真理を知らせることのできる人々のことを考えてみて下さい。彼らはそのために永遠にわたって皆さんを愛するようになるでしょう。それは彼らにとって100万ドルを受ける以上に価値あることです。」

その後しばらくして、私はテキサス州のヒューストンに住むひとりの若者から手紙を受けました。彼は自分の専門に関する大会があってそのためにニューヨークを訪れていて、私たちの集会にも出席したのです。手紙には次のように書かれていました。「リチャーズ兄弟、あなたは私たちが皆、人々に真理についての知識を伝える主の器となるようにと述べられました。そこで私は妻への手紙に、家に帰ったら伝えたいことがあると書きました。」彼は家に帰ると、私が言ったことを奥さんに伝えました。会社と一緒に働いている若者がいます。彼は、私

がモルモンであることを知っていますが、私は一度もその理由について話したことがありませんでした。そこで私は、いつか奥さんにも来てもらって夕食を一緒にしたいと思いました。夕食が終わってからいろいろ話をするのができると思ったからです。

この若者はその後、この夫婦をバプテスマの水に導いた喜びを2ページにわたって長々と書いてきました。その後、私はヒューズトンでバプテスマを受けたその夫婦にお会いしました。確か御主人の方は現在、ステーキ部の日曜学校会長をしていると思います。

私は米国の北西部を旅している時、ひとりの若者が、伝道時代の経験は100万ドルをくれると言われても手放せないもののだと言っているのを耳にしたことがあります。私は彼の後ろに座ってこう自分に問い返してみました。「私は、あのオランダの小さな国での最初の伝道を100万ドルと比べたら、どう考えるだろうか。」私は自分が教会に導いた人々のことを思い巡らしました。今では、その子供や孫、ひ孫までも伝道に出ています。もし彼らを100万ドルで教会外に売り渡したとしたら、私は一体どんな人間と言えるでしょうか。たったひとりの息子できえ、私が行なったすべてのことを償って余りある程のことを教会のために行なっているのです。

教会の偉大な宣教師のひとりであるマシュー・カウリー長老は、1946年3月12日、ブリガム・ヤング大学の礼拝集会で次のように述べています。教会の伝道プログラム

に対する私の気持ちを的確に表わしていると思われるので、ここで引用したいと思います。

「皆さんもお聞きになったと思いますが、私はニュージーランドで2度伝道しました。私はまた、ふたつの大学で勉強しました。そこで初めに皆さんに申し上げておきますが、もしも私がもう一度人生をやり直すとして、ニュージーランドへの伝道とふたつの大学での教育の内どちらかを選ばなければならないとしたら、私はあらゆる点から見て、ニュージーランドへの伝道を選ぶと思います。すなわち、教育面や霊的成長面、人格の向上、その他考えられるあらゆる面の成長をとってみても、そういう結論に達するのです。私は何を与えると言われても、伝道を教育と交換してしまうことは決してしないでしょ。したがって、今こうして私は皆さんの前に弁護士としてではなく、また大学を出た者としてでもなく、ひとりの宣教師として立っていることに喜びを覚えるのです。」(マシュー・カウリー、*Man of Faith*「信仰の人」p.203)

私も同じ気持ちです。

私たちは、人々の前に光を輝かすことができるように、単に言葉だけでなく生活そのものをも気高いものとしてこの伝道プログラムに携わるようにしなければなりません。これを行なうことにより、世の人々が私たちの良い行ないを見て、天にいる私たちの御父をあがめるようになるからです。

(マタイ5:16参照)

去る1月10日付の「チャーチニュース」に *Message of Inspiration* (心の糧) と題して、菊地良彦長老の言葉が掲載されました。含蓄のある言葉ですので皆さんと共に味わってみたいと思います。

## Message Of Inspiration

*Love precedes the miracle.*

*Love is a process; it is not  
a program. The love of  
Christ can overcome any  
of the worries of our lives  
and heal any human  
affliction.*

— Elder Yoshihiko Kikuchi

(From an address  
given at General  
Conference,  
Oct. 6, 1979.)

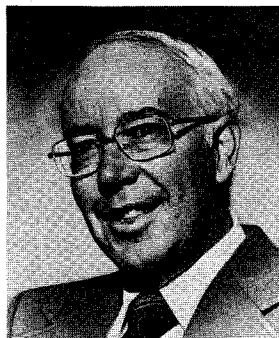


(上記の訳)

愛は奇跡に先駆ける。愛は行動を呼び起こす力であって、単なるプログラムではない。そしてキリストの愛は、人生のあらゆるわずらいを乗り越え、あらゆる苦しみを癒す力を持っている。

## ベル兄弟

### レーガン内閣の閣僚に



ユタ州高等教育委員会コミッショナーの任にある T・H・ベル兄弟が、このたびレーガン内閣の教育省長官(日本で言えば文部大臣にあたる)に指名された。正式には上院の承認を待って就任するが、承認されればエズラ・タフト・ベンソン(アイゼンハワー時代の農務長官)、デビッド・M・ケネディー(ニクソン時代の財務長官)、ジョージ・ロムニー(同住宅・都市開発省長官)に次いで、末日聖徒では4番目の入閣者となる。

ベル兄弟はソルトレークステーク部のエンサインピークワード部に所属し、ステーク部日曜学校会長を務めている。かつては中央日曜学校管理会員としても働いた。

ベル兄弟は過去に連邦政府教育局コミッショナーという要職にあったが、在任中は、歴代コミッショナーの中で最も有能な人物と評された。

アイダホ州の生まれであるベル兄弟は、田舎の高等学校の教師からアイダホ、ワイオミング、ユタ各州の教育委員会委員長まで、多彩な経歴を持つ人としても有名である。

主のみ業に献身する  
地区代表とステーク部長

担当地区代表	ステーク部名	ステーク部長
柏倉 仁	札幌	湯沼 誠二
	札幌西	菊地 敏
	仙台	船山 重憲
	高崎	北村 正隆
田中 健治	東京北	福田 真
	東京	新山 靖雄
	東京東	神崎 良太郎
	町田	青柳 弘一
	横浜	浅間 玄也
安芸 宏	名古屋西	中村 武央
	名古屋	土田 勝
	大阪	中野 正之
	大阪北	中村 晴兆
鈴木 正三	神戸	水野 敬一
	福岡 沖縄	吉沢 敏郎 長嶺 顕正



菊地 敏



高松 敏



北村 正隆



北村 正隆



水野 敬一



中村 武央



土田 勝



新山 靖雄



福田 真



神崎 良太郎



中野 正之



中村 晴兆



青柳 弘一



浅間 玄也



吉沢 敏郎

地区代表



柏倉 仁



田中 健治



安芸 宏



鈴木 正三



長嶺 顕正

地区代表は地域代表役員（菊地良彦長老）の下にあって担当地区を指導します。

現在、日本にはこのように16のステーク部が組織されていますが、近いうちに東京南、広島、高松にもステーク部が組織される予定です。今後その数は教会の発展に伴って、ますます増えていくことでしょう。



# 教会通訳者認定書が6人の兄弟に

このたび管理監督会から以下の兄弟たちに教会通訳者認定書が授与された。(五十音順)

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 黄木 信 (町田 2)  | 広田 英博 (東京 6)  |
| 神崎良太郎 (土浦)   | 八木沼修一 (ひばりが丘) |
| 品川 文弘 (東京 3) | 渡辺 驩 (町田 2)   |

## Certificate of Accreditation

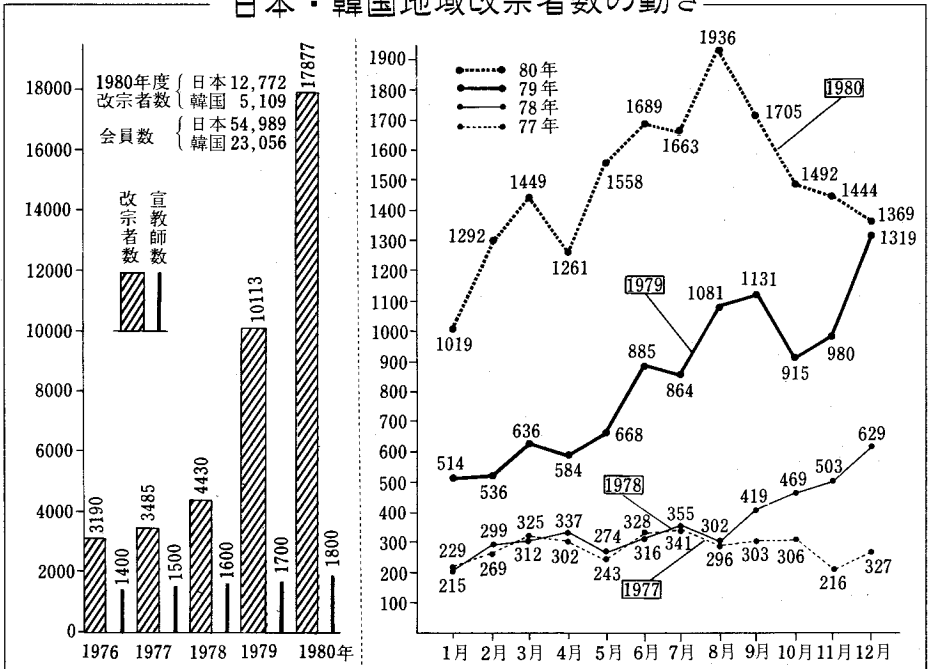
This is to certify that on August 2, 1980  
at Tokyo, Japan  
Akishiro, Hiroko  
completed the Translation Division interpretation  
course and successfully demonstrated ability  
as an interpreter of English  
into Japanese.  
We recommend this individual to interpret at events  
of the church of Jesus Christ of Latter-day Saints.

*Hiroko Akishiro*  
December 8, 1980  
BY: [Signature]  
[Signature]

この認定書は、教会が行なう通訳者養成セミナーを修了もしくはそれと同等の能力を有すると認められた人で、同時に地域大会やステーク部大会などでその能力を証明した人に与えられるもの。この認定書を受けると、教会認定通訳者として、依頼があればいつでも教会幹部の助けができるようになっていく。

なおTDCでは本年度、教会通訳者養成セミナーを各地区単位で開催する予定。これは週末を利用した12時間の集中セミナーで、通訳者となるために必要な技能とその伸ばし方について一つ一つ説明が行なわれる。詳しい日程については、後日ステーク部長会を通じて発表される予定である。

## 日本・韓国地域改宗者数の動き



## 儀式の執行者として働く喜び

府中ワード部  
松本 潔

愛する兄弟姉妹の皆様、私はへりくだり心から証申し上げます。この末日に回復されたイエス・キリストの福音はまことに真実であり、私たちの教会は人を救いに導くまことの教会であると。

私は、1980年10月27日、東京神殿の献堂式終了後、神殿の結び固めの部屋において、キンボール大管長から直接頭上に挨拶され、東京神殿における結び固めの儀式的執行者として、今も永世にもわたって結び固める神聖な権能を授けられました。この日から私の人生はまた新しく変わりました。

神殿の結び固めの部屋で奉仕する時、私は、白い衣を身につけた、美しく清らかな夫と妻、親と子を、「新しく且つ永遠の誓約」に関するすべての律法と共に、今も永世にもわたって結び固める時、まことに深く大きな天父の愛と、親の思いを感じます。また、人がこの世に生まれてきた目的をよく理解することができます。

人は天の両親のもとを離れてこの地上に参ります。この世の両親のもとで愛の中に育まれ、福音を聞き、祝福を受け、バプテスマを受け、確認を受け、聖任を受け、エンゲウメントを受け、最後に結び固めを受けます。いかなる人もこれなしには昇栄を受けることができないのです。

天父と御子の深い慈悲とみ守りの中で、この神聖な結び固めを受けられた兄弟姉妹の皆様にも申し上げます。いつまでも清くあって、家庭を天国のようにして下さい。

ひとりでも多くの人々に、清い思いを伝えて下さい。天父と御子の深い愛を皆様が行ないを通して示して下さい。

主はまことに生きておられます。約束の聖きみたまにより、日夜私たちを守り、励まして下さいます。願わくは、すべての人々が主の平安の中にありますように心から祈っております。アーメン。

## 夫婦を結ぶ厳粛な儀式に

横浜第2ワード部  
片岡 文一郎

1980年11月18日、私は49歳、姉妹は48歳で結婚の結び固めができましたことを、心から天上の父なる神に感謝申し上げます。道ならぬ道を歩き続けて、およそ50年の歳月が流れ、ようやく真の精神の門をくぐり得たのが1978年12月25日、キリスト生誕を記念する日の朝でした。そして今、墓を越えて続く夫婦を結ぶ厳粛な契約としての儀式を受けることができましたことを本当に嬉しく思っております。

私たちは神の秩序の中に生きています。忘却というこの世の定めと、邪悪なる罪のために、私たちはそれを見通す目を持っておりませんが、神はそのみこころのままに、その秩序に従って成長し、この世の目的に合うことを望んでおられます。結婚の結び固めは、神が私たちの人生に授けたもうた網の目のような秩序の中でひととき大切な秩序だと思いません。主はこの世の夫婦の契りが、死のとばりのかなたでも継続し、主の目的をまっとうすることを心から望んでおられるのです。私にとってこの儀式は、正に天にいます父なる神に通じる天のかけ橋となることを証できます。

また、神が啓示によって示された神聖な儀式に心から従順であるならば、神は天上の恵みと、真理への悟りの力を確かに与えて下さることを証できます。

これらを、御子イエス・キリストのみ名によって証いたします。アーメン。

## 果たされた主の約束

横浜第1ワード部  
斎藤 順子

私が教会の門をくぐったのは、20歳になって間もなくの頃でした。当時はまだ恋に感じ憧れを抱いていた私も、教会員として結婚の大切さを知るにつれて必ず神殿結婚をたいという思いが日に日に強まるのを覚えていました。

23歳の誕生日を迎えて間もなく、私は札幌伝道部の専任宣教師として召されました。その時、現在地区代表をしておられる柏倉長老が任命して下さいました。私はその時の祝福の言葉を今でも忘れることができません。長老は私の頭に手を按くやいなや次のように言われました。「あなたは伝道から戻った後、神殿で永遠の結婚をします。」その言葉を聞いた時驚くと同時に、もしこの召しを全力を尽くして果たすならば主は必ずその祝福を下さるという強い確信を得ることができました。なぜなら、教義と聖約82章10節の中に主の約束が明確に記されているからです。私は1年半の間、主の約束を信じすべてを忘れて伝道しました。その結果、多くの祝福を受けました。

帰還して8カ月後、横浜ステーク部扶助協会第二副会長に召されました。その時の任命の言葉の中にも結婚の祝福が約束されていました。「あなたはこの責任を通してよき伴侶が与えられ、天国のような家庭が築けるように祝福します。」主はまさにその約束を果たして下さい、昨年10月に横浜ステーク部分割により召しが解任される直前に、現在の主人と引き合わせて下さいました。私たちは新年明けて間もなく、1月15日に東京神殿において神殿長会、神殿職員をはじめ多くの友人が見守る中で式を挙げられたことを深く感謝して

おります。主が生きておられ、忠実に生活しようと努める時に、約束を必ず果たして下さいることをイエス・キリストのみ名により証申し上げます。アーメン。

永遠の結び固めに  
木月聖徒イエスキリスト教会

横浜第1ワード部  
鈴木 正則

補和ワード部

付属図書館

予想はしていたものの、私たちは両親の当然の望みに、十分に結ばれてもらえるよう答えねばなりませんでした。

私たちは、神殿結婚を心から望んでいました。同時に、お世話になった家族や親戚、すべての方々に喜んでもらえるような結婚を願っていました。私たちは祈りによって、次のような方法を見つけることができました。

結婚式の案内状と一緒に東京神殿のオープンハウスのパンフレットなどを送りました。親族には儀式について理解してもらえるよう、特別な印刷物を添えました。両親をオープンハウスに招待して、結び固めや花嫁の部屋を見てもらいました。名古屋での披露宴では、私たちの神殿結婚をスライドで紹介して、神殿の目的や意義について説明しました。兄弟姉妹の行き届いた準備のお蔭で、すべての人に満足してもらえる結婚披露宴でした。司式はありませんでしたが、娘の花嫁姿を見て、母親は感無量のようでした。

4年前に渡部兄弟から祝福師の祝福をいただいたことで知り合った私たちは、11月4日、その渡部兄弟を通して、永遠に結び固められました。

「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならぬ。」(使徒14:22)

神様は私たちが努力をする時に、いつも助け導いて下さることを証いたします。

